

414
A 718

報第百八十九号

米國刊行日本償金之條項譯文借閱之後

上申

別冊米國刊行日本償金之條項ハ我邦教育事務
關係候儀ニ付譯文一應借閱之為ノ具進也

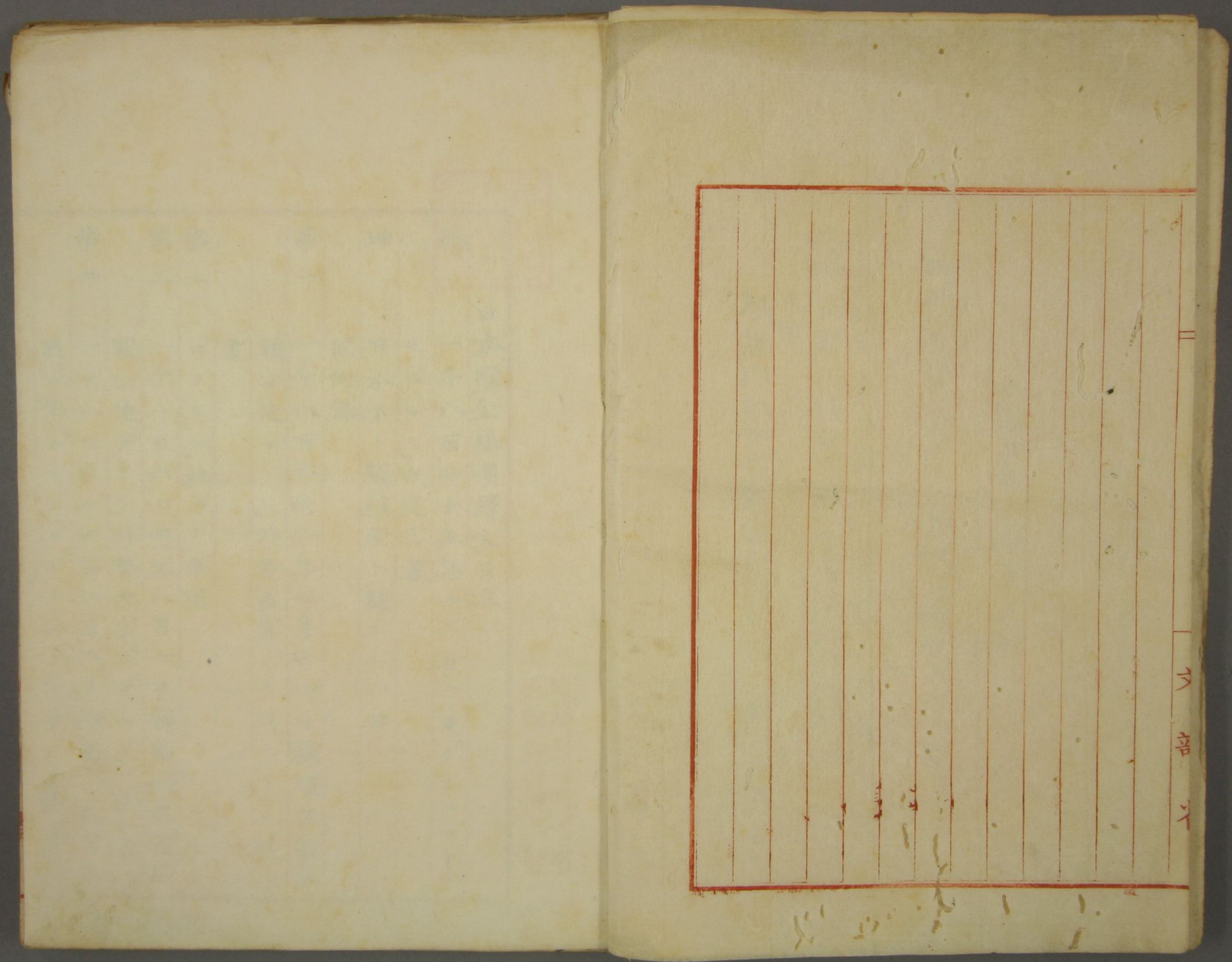
明治九年四月十三日

文部大輔田中不二磨

大政大臣三條實美殿

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

六十一



六
部
八



日本償金條項譯文目次

一千八百七十五年十二月一日「タフキツト、

モル」氏建言書

坤 日本下ノ闕償金ト題セル一冊

同附録

第一 一千八百六十三年七月廿四日横濱在留米

國公使アリシ外務長官「シウワルド」ニ送ル

書

第二 「ロツセル」社中ノ申稟

第三 一千八百六十四年八月十日神奈川在留米

國公使アリシ外務長官「シワルド」ニ送ル書

第四 一千八百六十四年八月八日神奈川在留米

國公使「アリシ」ガピテン、アラ井スニ送ル書

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

第五 日本外國奉行等大不列顛佛蘭西合衆國及

尼達蘭ノ公使ニ送ル書

第六 外國公使等出兵條約ノ手記

第七 一千八百六十四年十月一日神奈川在留米

國公使アリニ外務長官シワルドニ送ル書

第八 一千八百六十四年十月廿九日神奈川在留

米國公使アリニ外務長官シワルドニ送ル書

第九 日本酒井飛彈守ト四國公使ト會議條約

第十 一千八百六十四年十月二十二日在橫濱四

國公使ノ記錄

第十一 一千八百六十四年十月二十八日神奈川在

留米國公使アリニ外務長官シワルドニ送

ル書

第十二 橫濱碓泊合衆國船將カピテン、アラハスミ

ストル、アリニ送ル書

第十三 一千八百七十二年三月二十日華盛頓府海

軍省ノミスル、ロバルリニミストル、バン

クスニ送ル書

第十四 一千八百六十六年一月十九日巴黎在留米

國公使「ビキエロ」ミストル、シワルドニ送ル

書

第十五 一千八百六十六年八月二十八日在華盛頓

英國公使「ソル、エフ、ブル」ミストル、シワ

ルドニ送ル書

第十六 「ソル、ハリ、パークス」ミストル、ビンハムニ送

ル書

一千八百七十二年五月二十日下院外國事務委員長、ハックス氏日本償金ニ係ル具申
第十八
日本償金ノ殘額返付ノ儀ニ付合衆國學校長、教授、學監等四百五十二名連署ノ願書
但千八百七十三年一月二十七日外國事務委員ニ附シ且命シテ印行セシムルモノナリ

日本償金

方今華盛頓府國務局ニ於テ監守スル所ノ日本償金ト稱スル財本ニ就キ余恭ク二三ノ書類ヲ送呈ス
抑モ彼財本ハ去ル一千八百六十三年及ヒ六十四年間日本帝國不良ノ臣民下ノ關海峡ヲ阻厄セシ妨碍ニ因テ生スル所ノ損害及ヒ費用ノ償金ニシテ當時日本國內紛紜ノ際彼政府ニ要求セシ所ナリ然レトモ下ノ關ノ事ハ固ヨリ該政府ニ於テ毫モ聲援ヲ為シ、ニ非ラス且深ク其妄動ノ罪ヲ謝セリ而シテ其損害及ヒ不便ヲ生セシ事亦甚著明ナラス然ルニ英佛荷及ヒ合衆國政府三百萬弗ノ償金ヲ要求シ日本政府既ニ之ヲ交付セリ而シテ

合衆國収入セシ金額ハ七十五萬弗ナレド此面ノ
損害及ニ費用ヲ補ヒシ其實僅ニ五萬弗ニ過キス
餘剰ノ金莫ハ以テ合衆國ノ證券ヲ購求シタリ方
今其利支増積シテ總計百二十五萬弗以上ニ及ヘ
議事院ニ於テハ今日ニ至ル迄此財本ヲ如何ニ處
置スヘキ乎ヲ議セス今尙國務局之ヲ監守ス而シ
テ此償金ノ過當ナルト之ヲ要求セシ情實トニ就
テ物議ヲ生セリ爾後日本自由進歩殿々ノ景況ヲ
見ルヲ以テ益々議論紛々遂ニ議事院ヲシテ此償
金ヲ我國ノ用ニ供セサラシムルニ至レリ既ニ千
八百七十二年日本未タ償金ノ半額ヲ交付セサル
時ニ當テ下院ニ於テ一議案ヲ起シ日本政府ヲシ

テ此殘額交付ノ義務ヲ免レシムルノ權ヲ大統領
ニ附與セシト一旦衆議一決セシカトモ其議案上
院ニ達セサルヲ以テ遂ニ法令トナラサリシナリ
猶又下院及ヒ新聞紙ノ議論其他議事院ニ呈スル
書等ノ意趣ニ依ルニ人民一般ニ過額ノ本支ヲ以
テ日本ニ還付セント欲スルノ意ヲ表セリ今我人
民ノ公義寛容ノ意趣ヲ以テ考ルニ日本政府匱乏
ノ財貨ヲ分テ其人民教育進歩ノ切要ナル資用ト
ナセル者ノ幾分ヲ収却シテ以テ我金庫ヲ富スハ
太ク欲セサル所ナリ往年水師提督ペルリ條約ヲ
結テ日本ノ諸港ヲ開キシヨリ以來日本文明進歩
ノ速ニルヲ諸國歴史ニ於テ未曾テ其比ヲ見ス且
日本ノ安寧ハ余輩ノ常ニ深ク感感スル所ニシテ

實力ヲ以テ之ヲ扶助セント欲スルナリ然ルニ今
一ノ過失ニ乘シテ該國人民進歩資用ノ幾分ヲ収
却スルハ我恒ニ宣言セル善意ニ非サルニ似タリ
余日本帝國ニ在ルテ殆ト三年日本人ノ為ニ學制
ヲ設立スルノ事業ヲ分掌ス因テ其人民ノ進歩ヲ
欲スルニ熱心ナルヲ保證スルヲ得タリ是故ニ
此財本ヲ還付スルハ盡ク之ヲ教育ノ資用ニ使
給センヲ確信スルナリ然レハ我國ニ於テ此公
義ヲ施スハ日本ノ安寧長久ヲ助ル偉功ト謂ハサ
ルヲ得ンヤ兩國ノ地勢ヲ以テ之ヲ考ルニ日本ニ
於テ百工ノ盛大ニ赴クハ合衆國ノ商業ニ於テ最
モ感及スル所ナリ故ニ帝道德上ニ於テ之ヲ奨励
スルノミナラス此際實力ヲ以テ日本永久ノ進歩

ヲ扶ルハ政治上ニ於テ亦策ノ得タル者ト謂フヘシ
余希クハ貴下等此事ヲ熟慮シ又力ヲ盡シテ此財
本及ヒ利支ヲ併セテ之ヲ還付シ以テ益兩國ノ利
益ヲ成サンヲ又議事院ニ於テモ速ニ此ニ注意
シ印行其他公私ノ方法ヲ以テ人民一般ノ感動ヲ
起サンヲ希望スルナリ
此他尚申報ヲ要スルハ余喜テ之ヲ備フベシ且
此回ノ目的ヲ達センカ為ニ貴下等ノ意見アラハ
幸ニ之ヲ教ヘヨ若シ通信ヲ要スルヲアラハ當地
或ハ在費府日本博覽會事務局ニ充テ送致セラレ
ンヲ乞フ

千八百七十五年十二月一日

ニュージエリシー
ニューブランスウヰツク
ダウヰツトモルレー一拜

日本下ノ關償金

日本國內ノ動搖今日ニ至ル其由来ヲ尋ルニ千八百五十三年米國水師提督ペルリーノ偶々日本ニ來ルニアリ日本政府ハ數百年間鎖港ヲ旨トシ法ヲ制シ法ヲ嚴ニシ以テ外國交際ヲ拒絶ス而シテ其依頭約束ヲ結テ境内ニ一貿易場ヲ開ク者ハ獨リ蘭人ノミニシテ其他外國交際ト稱スル者ハ外船ノ偶々潮流風波ニ遭テ邊海ニ漂泊スル者ヲ扶助スルニ止ルノミ

此固陋拒絶ノ處置ヲ為ス數百年ノ久キヲ經ルカ故ニ人心漸ク此風ニ浸染シ外國交際ヲ以テ最モ危弊ヲ釀スベキ者トシ今日ニ至テモ尚ホ未ダ全ク此風ヲ洗滌スルナシ

千八百六十年ヨリ千八百七十年ニ至ル迄外國人ノ開國ヲ促ス議論甚苛劇ナリ方今ニ至テ余輩漸ク其苛劇ナル議論ノ實効ヲ見ルニ至レリ而シテ當時國內居留ノ外國人ト雖日本人ノ外國人ヲ忌憚シ且從來ノ政體モ外國人ノ為ニ其權衡ヲ損スルノ何故ナルヲ知ル者稀ナリ

國勢ノ變遷シテ斯ノ如ク至重ノ關係ヲ釀成セシハモト事ノ米人ヨリ起ルカ故ニ其利害ニ關スル者ハ固ヨリ米人ナラサルヲ得ス而シテ歐洲各國ノ日本ヲ遇スル恰モ不意ニ光ヲ放テ之ヲ射ル如ク常ニ温厚平和ヲ以テセス且國家危急ノ際ニ當テ其人民ヲ遇スル苛劇ニ於テモ之ヲ追懐スル者外國人ヲ厭フノ心ヲ懷キ多年懇切ノ同感ノ

情ヲ盡スニ非ラサレハ之ヲ一掃スルニ能ハス是今日ノ日本人ト交際スル外國人ノ皆以テ認知スル所ナリ

今此書ノ目的トスル所ハ外國人ノ待遇ヨリシテ此嫌惡ノ心ヲ起シ從テ開國ノ期ヲ阻滯セシ情實ノ概畧ヲ揭示スルニアリ熟此情實ヲ以テ考フルニ歐洲ノ各國此等ノ東洋ノ小國ヲ遇スルコト傲慢苛劇ヲ極ムルハ真ニ憐ム可シ然レモ台衆國ヨリ以テ論スルキハ此過ヲ改メ寛裕ノ待遇ヲ為シ以テ其一旦失シタル信愛ヲ復スル幸ニ尙未晚シトセス

外國人ノ此事アリシヤ千八百六十三年六十四年ノ間ニアリ而シテ當時日本ノ政體ハ國ニ二王アリ

リテ外國人之カ為ニ大ニ惑ヘリ國帝ハ京都ニア
リテ二十五百年來皇統連綿トシテ絶エス然レモ
其政權ヲ失シテ有名無實ナルト既ニ久シ其政權
ハ將軍ノ官アリテ之ヲ掌握ス外國人ノ大君ト稱
スル者即是ナリ
抑此大君ト稱スル者ハ全國軍務總督ニシテ漸次
權勢ヲ擅ニシ終ニ一國ノ全權ヲ掌握スルニ至レ
リ古來各國ニ於テ其例多シトス然レモ其實ハ國
帝ノ臣ニシテ之ニ臣事シ自テ政治ヲ施スト雖固
ヨリ全國ノ政權ヲ委任セラル、者ナリ將軍ハ江
戸ニ居館ヲ設ケ殆ト國王ノ威權ヲ持シ其護衛ノ
臣ハ朝臣ト遙ニ其勢ヲ異ニセリ
此ノ如ク將軍ヲ置ク制ノ久ク存シタルハ古來未

曾テ其例ヲ見ス又將軍ノ國帝ヲ廢シテ其位ヲ篡
奪セサルハ余輩ノ怪ム所ナリ從來將軍ノ斯ノ如
ク國帝ニ代テ政權ヲ執ル者十四人皆一家ノ世襲
ニシテ國帝ト雖其費用ハ之ヲ將軍ニ仰ケリ斯ノ
如クナルト既ニ二百五十年若日本ヲ令一國ナ
ラシメハ斯ノ如キ政體ヲ設クルト能ハスト雖國
内分州シテ大名之ニ割據シ各其管内ヲ統轄シテ
殆ト獨立ノ勢ヲ為シ且互ニ其權利ヲ争フ而此大
名モ或ハ將軍ノ封スル者アリテ又其親族ナルア
リ或ハ情好ヲ厚クシテ政治ノ便安ヲ計ラシカ
クノニ親姻ヲナセル者アリ或ハ舊家ニシテ久シク
權勢ヲ挾ミ竊ニ將家ノ威權已ニ卓越スルヲ厭フ
者アリ此等ノ大名ノ輩ハ假令將軍ノ意帝位ヲ傾

覆セントスルモ之ニ左祖セサルヲ論ヲ俟タスシ
テ明ナリ故ニ將軍モ其激衝ヲ受ンヨリハ寧昔日
ノ體裁ヲ存スルヲ以テ自家保全ノ便利トセリ
ペルリ一其他外國公使ノ日本ト條約ヲ結フヤ則
チ將軍ト結ブ所ナリ是外國人モ全權ノ將軍ニア
ルヲ知ルヲ以テナリ而シテ外國交際ノ事務ハ將
軍獨之ヲ整理スルノ權ヲ要シ國帝ノ許可ヲ經ス
シテ自ラ其條約ヲ結ヒ久シク後國帝ヲ其曾テ准
許セサル條約ヲ唯諾セシム是即テ條約ノ欽誤ニ
シテ後年國ノ患害ヲ生スル所以ナリ若夫國帝ヲ
ノ初ノ此條約ヲ確定セシメハ國民舉テ之ヲ遵奉
スベシト雖其否ラサルヲ以テ人民之ヲ認テ真ノ
條約トセス又國帝及勤王ノ輩ハモト已レカ認許

セサル條約ナレハ之ヲ遵守スルヲ其義務トセス
却テ之ヲ國ノ患トセリ後大名等將軍ノ政令ヲ受
ケス且其權ヲ挫折セントスルニ至リシハ斯ノ如
キ至大至重ノ事ニ於テ其機務ヲ盡サ、ルヲ以テ
ナリ且大名等初ノ拒絶ノ論ヲ主張シテ外國交際
ヲ拒ミ後年ニ至テ入之ヲ認許セシヲ以テ考フレ
ハ其條約ノ失誤ヲ口實トシテ將軍ノ權ヲ推滅セ
ントセシメ明ナリ
大名ノ將軍ニ抗抵セシ者ハ薩長ノ二藩ヲ以テ魁
トス蓋其領地ノ富強ト幕府ヲ距ルト遠キト舊來
ノ名家ニシテ國內ノ人望アルトヲ以テ殆ト自主
獨立ノ勢ヲ為セリ而シテ此國內ノ人望ヲ挾テ將軍
ニ抗抵スルハ固ヨリ彼輩ノ欲セサル所ニアラス

故ニ將軍ノ勢之カ為ニ大ニ宥促ス又將軍ノ力足
ラズシテ職掌ノ義啓ヲ盡ス一能ハサルヲ以テ外
國交際ヲ絶ントスルモ外國之ヲ聽カサル一必セ
リ而シテ大名等京都ニ會シ朝廷ヲ擁護獎勵シ以
テ將軍ニ逼ルニ掃攘鎖港ノ事ヲ以テセリ此國難
ノ極度ニ至リシハ千八百六十三年六十四年ノ際
ニシテ當時掃攘ノ議論最甚シク日本人屢外國人
ト相撃チ且外國公使館ヲ襲撃シ終ニ長州暴動ノ
舉ニ及ヘリ
將軍ノ黨派ハ其實外國條約ヲ固守セント欲スル
一毫モ疑フ所ニアラス且仮令條約ヲ廢セント欲
スルモ外國ノ之ヲ首肯セサラン一固ヨリ彼輩ノ
知ル所ナリ然レモ此條約ヲ墨守スルヲ以テ長州

ノ暴動ヲ釀シ以テ到底將家ノ傾覆ヲ招クニ至ル
カ故ニ已ムヲ得ス一時其形勢ニ從ヒ掃攘ノ策ヲ
施サントス是ニ於テ將軍行政ノ官タルヲ以テ遂
ニ國帝ノ命ヲ奉シテ之ヲ四方ノ大名ニ令スルニ
外國交際ヲ拒絕セン一ヲ以テシ其實ハ事ノ此ニ
至ラサラシモノ一ヲ謀レリ
日本英公使館書記官アタム氏著ハ所ノ日本史ニ
曰ク將軍ノ執政鎖港ノ令ヲ傳ルニ當テ諂テ曰ク
將軍ノ此令ヲ外國公使ニ傳ル固ヨリ將軍ノ義務
ニシテ其實死文ニ屬スベシト之ニ因テ考フレハ
當時ノ執政此條約ヲ守ルニ信ヲ以テセシ一明ナ
リト長州ノ領地ハ日本大島ノ西南ノ隅ニアリテ
周防長門ノ二州ヲ兼併シ之ヲ長州ト云フ長門ハ

大洋ト内海トヲ連接スル下ノ關海峡ニ臨ミ其最
狭一都、兩岸相隔ル一里ニ足ラス北岸ハ岬々
タル絶壁アリテ之ヲ界ス此咽喉ノ地ニ砲臺ヲ築
造シ輓近歐洲製造ノ大砲ヲ架セリ而シテ其目的ト
スル所ノ名ハ外船ノ通航ヲ扞スルニアリテ其實
ハ將軍ニ抗スルニアリ然ルニ千八百六十三年六
月米國小蒸氣船ペンブローク号貨物ヲ載セテ橫
濱ヨリ長崎及上海ヘ赴カントシテ二十五日下ノ
關ニ碇泊セシニ砲臺ヨリ大砲ヲ發シ又蒸氣船二
艘ヲ以テ急ニ米國ペンブローク号ヲ襲撃セリ是
ニ於テペンブローク号船ハ直ニ拔錨シ幸ニ損害
ヲ受ケス豊後海峡ヲ經テ其危ヲ免レタリ
米國公使ハ彼暴動ヲ聞テ遽カニ日本政府ニ告テ

船主ノ為ニ償金ヲ需メ又米國軍艦ワイターミン
グ号船將マクドールガルト急ニ曩日ノ暴動ニ報シ
テ謀レリマクドールガル七月十六日ヲ以テ下ノ
關ニ達シ其海岸ニ船艦ノアルヲ以テ直ニ其船艦
ノ間ヲ衝キ大ニ之ヲ襲撃ス敵船三艘及陸地ノ砲
臺ヨリ射撃セラル、コト急ナリト雖猶進撃シ遂
ニ兩扼船一艘ヲ推テ之ヲ沈メ又蒸氣船一號ヲ襲
撃破セリ此時米人死スル者五人傷スル者六人
ナリ日本人ノ死傷ハ詳ナラス米國關係ノ事件及
シ其暴舉ニ報ル所ノ如シ
七月上旬佛蘭西ノ飛船キヤンチヤン号橫濱ヨリ
上海ヘトカントシテ下ノ關ニ到ルニ又砲臺ヨリ
射撃セラレ損害ヲ被ルテ數所已ムヲ得ス船艦ノ

方位ヲ廻ラシ豊後海峡ヲ經テ上海ニ達スルヲ得
タハ是ニ於テ佛蘭西ノ軍艦シミラミス及タンク
リト下号直ニ下ノ關ニ到リテ大ニ其砲臺ヲ擊破
シ且近隣ノ村落ヲ燒テ去ル此時佛兵傷スル者僅
ニ三人日本人ノ死傷分明ナラスト雖其多キト疑
ナシ
七月十九日荷蘭軍艦ノヅサ号長寄ヨリ横濱ニ到
ラントシテ下ノ關ノ備アルヲ間ド雖船將之ヲ意
トナサス其海峡ニ到リシニ初ハ空砲ヲ放テ之ヲ
憎カシ後ニハ實丸ヲ放テ之ヲ襲撃シ砲戰數合勝
敗遂ニ決セス荷人死スル者四人傷スル者五人ナ
リ
下ノ關海峡ノ事情大略前ニ記載スル如シ而シ米

佛荷ノ外他國ノ船艦曾テ砲撃セラレ、トナシ英
船ノ此害ニ遭ハサル又奇ト云フベシ然レハ爾後
下ノ關ニ兵艦ヲ遣リテ前日ノ舉動ヲ報ユルニ當
テ英公使モ亦其員ニ加リ且均ク其償金ヲ分取セ
リ此時ニ當テ將軍京師ニアリ故ニ幕府ノ執政專
ラ此暴動ノ事件ヲ擔當シ且深ク之ヲ外國公使ニ
謝シ國事少ク平穩ニ至ラハ長州ヲ罰ハベシトテ
約セリ然レハ幕府ノ力微ニシテ外國ノ寬裕ヲ仰
クノ意ヲ秘スルヲ能ハス
米國公使ハ時日ヲ失セスペンブローク号船主
為シ償金ヲ要求スルヲ左ノ如シ
大洋ヲ達センガ為ニ不知案内且長遠ノ航海ヲ爲
シテ時日ヲ失スルヲ五日一日三百弗ニ計 千五百弗

長寄ヨリ旅客荷物ヲ載セサルヲ以テ

其損耗 六千五百弗

船中ノ士官及水夫ノ危難ニ逢フヲ以テ之

ニ分付スル償金 二千弗

合計

一萬弗

米國公使又日本政府ニ告ルニ「ワイラーミング」
ノ事ヲ以テセリ然レモ此軍艦ニ就テ償金ヲ得ル
ノ權アリヤ否ヤ明カナラス固ヨリ公然戰爭ノ為
ニ遣ス所ニシテ幕府ノ之ヲ依頼スルニアラス又
幕府ノ為ニスルニ非ラス蓋米國公使及艦將「
ドーガル」ノ責ニ任スル所ナリ故ニ此時若敵ノ砲
撃ニ遭テ損害ヲ被ルモ其償金ヲ需ルノ權ナカル
ベシ米國公使モ亦之ヲ知ルカ故ニ政府ニ論スル

ニ「ワイラーミング」号ノ戰ヲ挑マサルニ敵先之ヲ

砲撃スト云ヘリ故ニ此償金要求ノ事ニ就テハ其

論スル所極テ寛ナリ曰ク我國旗ヲ犯スニ就テハ

別ニ償金ヲ要求セス然レモ政府若意アラハ養老

銀トシテ死傷ノ者ニ某額ヲ供スヘシ然ラハ余自

ラ責ニ任シ兩國交際上ノ親睦ヲ謀リ以テ此般ノ

事件ヲ定ムベシト然レモ日本政府此償金 出ス

ヲ肯セス却テ之ヲ論駁シテ曰クワイラーミング

艦ノ傷害スル所ハ自ラ受ル所ノ損害ニ過スト古

ニ米國公使モ強テ復之ヲ請求スルナシ

ペレフロック号償金ノ事ハ政府速ニ之ヲ許諾セ

リ然レモ國用ノ足ルサルヲ以テ暫時ノ延期ヲ請

ヘリ爾後千八百六十四年八月十日米國公使本國

ニ書ヲ送テ曰ク日本政府余カ書翰ヲ返シ且之ニ
答書シテ曰ク政府神奈川奉行ニ命シ九月五日ヨ
以テペンブローク号船償金ノ母子合計一萬二千
弗ヲ償却スベシ若シ此書翰ヲ示スト雖其定日ニ之
ヲ交付セズンハ政府ノ諸運上ヲ以テ此金額ニ充
ツベシト且數月前政府ニ請フニ利子ヲ以テセシ
ハ此償金ヲ促サンカ為ナリト云々故ニペンブロー
ク号船主ハ其損失ニ此スレハ過當ノ償金ヲ得
タリ利子ニ至テハ船主ノ之ヲ要求スルニ非ラス
又之ヲ希望スルニ非ラス余モ亦ペンブローク船
主ノ為ニ之ヲ政府ニ請フニ非ラス只母金ノ交付
ヲ促サンカ為ナリト故ニペンブローク船主ノ
一萬弗ヲ得ルノミナラス尚合衆國政府ニ於テ二

千弗過額ヲ得タリ
合衆國關係ノ事件ハ其結局斯ノ如シペンブロー
ク船主ハ十分ノ償金ヲ得國旗ヲ犯セシ罪ハワ
イヲミシングラ以テ十分ニ之ヲ罰シ政府ニ於テ
ハ深ク其暴動ヲ謝シ且償金ヲ出サンコトヲ約セリ
米國公使前ニ記載セル書翰ニ曰ク余本國ノ命ヲ
奉シ日本政府ヨリ償金ヲ需メシカ為ニ三週間江
戸ニ滞留シ本月五日ヲ以テ當地ヘ歸著セリト此
ヨリ前二日合衆國軍艦シエームスタウン船將
ロープレイス氏ヘ書ヲ送テ曰ク償金請求ノ事
件ニ就テハ日本政府十分ニ之ヲ處分セリ而シテ其
結局此ニ至ル大貴下ノ助力ニヨル依テ之ヲ
貴下ニ謝スルハ余カ欣然スル所ナリト事斯ノ如

ク十分ニ其結局ヲナセリト雖他ノ外國公使等下
ノ関ハ其艦ヲ遣ルニ當テ米國公使モ亦其員ニ加
ハレリ而シテ英國公使モ此員ニ在リト雖英國ノ
船艦ハ曾テ砲撃ニ遇フナキカ故ニ別ニ訴フベ
キ情實アルノ理ナシレ總テ長州ノ暴舉ニ就テハ日
本政府固ヨリ之ニ關セス且追討ノ兵集ルヲ待
之ヲ罰セントヲ約セリ然レモ公使等事ノ遲延
堪ヘス政府ニ書ヲ送テ曰ク一日ノ間モ之ヲ許サ
スト又責テ曰ク既ニ空ク三十日ヲ過クト雖未何
等ノ舉アラスト一旦斯ノ如ク政府ニ逼レリト雖
後又書翰ヲ送テ曰ク日本政府此般ノ事ヲ為サ
リレハ貴國ノ兵隊目今大君殿下ヲ衛護スルヲ以
テナリト是誠ニ然リ而シテ外國公使ノ直ニ為サ

ル可トサルモノトナス所ノモノハ政府ノ力ノ全
ク及ハサル所ナリ
日本政府遂ニ下ノ開航海ノ自由ヲ得セシムル
能ハサルヲ以テ公使等自ラ之ヲ為サント決セ
リ而シテ其口實トスルモノハ貿易ノ為ニ此海峡ヲ
開クニアリテ爾後ノ商議ニ於テモ亦此議ヲ起セ
リ且公使等貿易ノ為ニ自由ニ内海ヲ通航スルノ
權ヲ主張セントセリ然レモ内海通航ノ自由ハ條
約ニ於テ之ヲ記セス又内海ニ一所ノ開港場ナリ
又諸開港場ノ通路及此開港場ト外國港トノ海路
ト雖此内海ニ通スルトナシ日本ノ内海ハ全ク其
管轄内ニアリテ各所ノ海峡モ其廣一里ナルモノ
ナシ日本ノ此内海ヲ管轄スルノ權アルヤ猶土耳

其ノニルモテ海ヲ管轄スルノ權アルカ如シ而シ
此權ハ條約ニ非サルヨリハ決シテ動ス可ラス又
軍艦ヲ以テ日本ノ管内ヲ脅迫シ其妨碍ヲ除却シ
テ強テ之ヲ通航セントスルハ自ラ其危難ヲ冒
サ、ルヲ得ス外國公使若シ此理ヲ知ラスト雖此理
ノカハ更ニ減スルニアラス知テ之ヲ日本政府
諷知セサルモ亦此理ノカヲ減スルニ非
兵力ヲ以テ他國ノ内乱ニ關涉スル如キ大事ニ至
テハ公使必本國政府ノ命ヲ竣ツベキナリ然レ
斯ノ如キハモト世界萬國ノ認取スル強國ニ對シ
テ施ス所ニシテ支那日本及印度ノ如キハ其友邦
ナキヲ以テ斯ノ如キ處置ヲ為スニ足ラス若シ此時
ニ當テ本國ノ命ヲ竣タハ下ノ關ヘ軍艦ヲ遣ラシ

メサレ下必セリ各國公使ノ下ノ關ヘ軍艦ヲ遣ル
ニ當テ英國宰相アルロ、ロセルヨリ英公使サ、ル
トサルヲホルドアルコックヘノ書翰未到ラス其書
ニ曰ク日本内國ニ於テハ必ス兵ヲ動ス可ラス且
倭令海軍戰爭ト雖自己ノ危キヲ防クニ非ラサル
ヨリハ日本政府或ハ其他大名等ニ對シテ兵ヲ開
クハ英國政府ノ欲セサル所ナリ云々人曰ク去年
一月七日皇帝陛下ノ内閣ニ於テ議定セル條例ニ
依リ若シ英艦ノ日本内海或ハ其海峡ニ入り之カ為
ニ或ハ騷擾ヲ醸スニ至リ或ハ兩國人民ノ交際ヲ
妨シキハ宜ク其航海ヲ禁止シ或ハ之ヲ制限シ或
ハ其規則ヲ創立スルニ若シ英艦ニ害ヲ加ルハ兵
力ヲ用井ス償金ヲ得ベシ是此條例ノ責下ニ委任

スルノ權ナリ云云爾後ノ書翰ニ曰ク大坂未開港ニ至ラス國帝今尚京都ニアリ故ニ内海通航ノ外國貿易ノ為ニ要用ナリトスルハ余カ了解セサル所ナリト
八月十八日ノ書翰ニ於テモ亦前書ノ意趣ヲ反覆シテ曰ク過般貴下ノ書翰ト他ノ信スベキ申報トニ依レハ内海ヲ通航シテ長州ノ砲臺ニ害ヲ被ル者ハ米佛荷ノ三國ニシテ佛蘭西政府ハ既ニ之ヲ懲罰シテ以テ満足シ米國公使ハ新兵ノ到ルニ非サレハ兵ヲ起サスト而シテ英國海軍ヲ内海ニ兵ヲ起サシメント欲スル者ハ獨リ和蘭政府ノミ而シテ京都大坂ノ二所未開カス故ニ内海ノ通航ハ歐米貿易ノ為ニ要用ナラサルカ如シ云々入曰

ノ事情斯ノ如クナルヲ以テ必^ス水師提督キ^レノ^ルヲノ長州ニ對シ兵ヲ動カサ^レラ^シト^テ是英國政府ノ欲スル所ナリト
各國ノ軍艦下ノ關ニ出帆スルハ九月二十八日ニシテ前條ノ書翰未到^リテス此船隊ハ英艦九艘佛艦三艘荷艦四艘ヲ以テ編成ス米國軍艦ハ[「]ジエ[」]ムスタウ[」]ント稱スル帆船一艘ノ[」]ニ[」]シ[」]ト當時日本海ニ於テ別ニ軍艦ノアラサルヲ以テ[「]ター[」]キ[」]ア[」]ニト稱スル小蒸氣船一艘ヲ傭ヒテ此船隊ニ編入セリ而シテ英國水師提督キユー[」]パ[」]ル[」]之ヲ總督シ直ニ下ノ關ニ到リ砲戰數合遂ニ砲臺ノ發砲ヲ息止シ其兵卒ヲ驅逐シ悉ク其砲臺ヲ破毀シ其大砲[」]掠奪セリ是ニ於テ長州藩主遂ニ[」]辭[」]ヲ[」]卑[」]シ[」]和[」]ヲ[」]講[」]シ

砲臺ヲ再築セス且償金若干ヲ出サント約シ且
前日ノ暴舉ヲ謝スルニ朝旨及幕府ノ命ヲ以テス
此朝旨幕府ノ命タル曾テ外國人ヲ拒絶センカ為
ニ布告スル所ニシテ且此時ニ當テ長州藩主既ニ
京都ニ於テ將軍ニ抗シ且王城ヲ圍ムト雖尚洋テ
此朝旨幕府ノ命ヲ遵奉セントスル又奇ト謂フヘ
シ
各國兵ヲ戢テ横濱ニ帰リテ公使等集會シテ今般
ノ償金ヲ需メントヲ議セリ抑各國ノ下ノ關ニ軍
艦ヲ遣ルヤ本國ノ命ヲ竣タスシテ自己ノ獨權ヲ
以テセリ且日本政府ノ願望ニ反シ又曾テ此四火
國ノ連合セル兵艦ノ入費ヲ以テ日本ノ空乏ナル
金庫ニ課セントヲ日本政府ニ告ケシニ非ス目ヨ

リ公使等日本政府ノ依頼ヲ受ケシニモ非ス其願
望ニ反シテ自ラ厚意ヲ以テ之ヲ為シ今却テ其償
金ヲ日本政府ニ取ラントスルナリ
九月二十三日以來各國公使幕使ト相議ス此時各
國公使ノ魁ナル者ハ英公使「サー、リユー、サル、フ、ホ
ルド、アル、コック」ニシテ則テ幕使ニ告テ曰ク幕府或
ハ大名ヨリ金ヲ要求スルハ我英國政府ノ欲セザ
ル所ナリ故ニ四國^{英米佛荷}ノ長州ニ需ル所ノ償金ノ
處分ヲ大君自ラ之ヲ擔任シ其全額ヲ付スルカ或
ハ條約國ノ便宜ニ從ヒ償金ニ代テ下ノ關又ハ其
近傍ノ一港ヲ開キ以テ今回ノ處分ヲ定ム可シト
幕使之ニ答テ曰ク長州藩主幕府ニ對シテ罪アリ
幕府今將ニ之ヲ罰セントス乃チ其領地ヲ沒收シ

之ヲ以テ出征ノ入費ヲ償フベシト英公使之ニ答
テ曰ク幕使ノ言フ所目今ノ議ニアラス其意趣ハ
大君自ラ此償金處分ノ條約ノ責ニ任スルヤ否ヤ
ニアリ且曰フ日本政府若ク之ヲ承諾セス又自ラ長
州藩主ノ義務ニ任セスンハ余輩自ラ長州ニ到リ
其藩主ニ諮謀シテ其管内ニ一港ヲ開クベシト是
ニ於テ幕使遂ニ其威力及議論ノ抗ス可ラサルヲ
知リ長州償金ノ處分ヲ擔當スルノ約束ヲ書シテ
未^レ其償金ノ額幾許ナルヤヲ定メス
千八百六十四年十月二十二日遂ニ最後ノ條約ヲ
結ブ其條左ノ如シ
第一條○四國償金ノ額統計三百萬弗トス但^シ此金
額ハ長州暴動ノ償金下ノ關贖金同盟海軍入費等

一切ノ償額ナリ
第二條○此償金ハ每季五十萬弗ノ比例ヲ以テ六
季ニ拂フベシ但^シ各國公使ヨリ其本國政府ノ命
ト此條約ノ異議ナキトヲ以テ幕府ニ聞スルノ日
ヨリ之ヲ拂フベシ
第三條○金ヲ受ルハ各國ノ目的ニアラス但^シ日
本トノ交誼ヲヨクシ且之ヲノ彼是一層便利ナラ
シムルヲ以テ尙^ホ目的トスルカ故ニ大君殿下若^ク償
金ニ代ヘテ下ノ開ヲ開クカ將^テ内海ニ於テ便宜
ノ一港ヲ開カントスルキハ外國政府前條ノ條約
ニ基キ此開港ヲ認許スルモ亦償金ヲ要スルモ其
欲スル所ニ從フベシ
第四條○日本政府ハ本日ヨリ十五日ヲ限リ此條

約ヲ確定スベシ
此後四國ノ政府約束ヲ結ビ償金ヲ四分シテ均ク
之ヲ分領セントテ約セリ
今初テ此償金條約ヲ讀ムキハ其償金ノ大額ヲ驚
カサルヲ得ス米國公使モ其顛末ヲ本國政府ニ報
スルニ當テ其書翰ニ載スルニ此回ノ處分十分ニ
過タルトテ以テセリ且曰ク余幕使ニ逢フノ前英
國公使ト謀リ二百萬弗ヲ以テ償金ノ額ト定メタ
リ且此二百萬弗ヲ以テ四國ニ配當スル亦容易ナ
リシカ佛國公使三百萬弗ヲ以テ償金ノ額トセン
トテ發議セリ因テ余モ亦日本政府ノ恐クハ償金
ニ代ヘテ一港ヲ開クベキカ故ニ速ニ之ヲ許諾セ
リト云々又曰ク日本政府償金ニ代ルニ一港ヲ開

カサルキハ三百萬弗ヲ取ルトモ不當ト云フ可ラ
スト
今偏頗ノ心ヲ懷カス沈靜ニ此事情ヲ熟思スルニ
此強國ノ公使等此弱國ト不當ノ條約ヲ為スト云
ハサレテ得ス抑償金トシテ三百萬弗ノ大額ヲ算
定スル又何ノ理ソヤ幕府既ニ文明國普通ノ法ニ
從テ長州ノ暴動ヲ認取セスノ深ク之ヲ各國ニ謝
セリ故ニ此償金タル固ヨリ各國ニ禮ヲ失スルカ
為ニ出ス所ニ非ラス
此條約ノ魁タル英國ハ毫モ損失ヲ受ケス而シテ合
衆國ハ既ニペンブローク號船ノ償金ヲ得タリ故
ニ此償金ハ此損失ヲ償フモノト云フ可ラス後今
同盟國出征ノ入費ヲ以テ日本政府ニ課スルニ至

外
部
省

當トスルモ其費額ハ僅ニ此般ノ償金ノ一小部分
ニ過キス此過當ノ償金ヲ需ルハモト日本政府ノ
償_クテ能ハスシテ遂ニ止ムヲ得ス貿易場一_所ヲ
開カシムルノ主意ニ出ルナリ而シテ此償額ヲ定ル
固ヨリ榮譽公義ニ因ラス其專ラ主トスル_所ハ日
本ヲメ償ハシムルノ額ヲ定ルニアラス又日本政
府ノ償_ク得ベキ額ヲ定ルニ非ス蓋日本政府ノ償
_ク得サル額ヲ定ルニアリ故ニ公使等ノ論スル_所
ニ依レハ二百萬弗ハ尚能ク日本政府ノ及_ブ所ナ
リ故ニ之ヲ増額シテ三百萬弗トナセリト
專ラ此償金ニ關係スル者ハ合衆國ナリ日本政府
既ニ其全額ヲ交付シ以テ之ヲ結算セリ今合衆國
政府ノ帳簿ヲ見ルニ其得ル_所ノ金額七十五萬弗

ニシテ國務卿ノ諸費ヲ償フ僅ニ五萬弗ニ過キス
故ニ方今ノ餘剩母子共ニ統計百二十五萬弗アリ
實ニ有益ノ處置ト云フベシ
千八百七十二年日本ノ使節歐米各國ヲ巡回スル
ニ當リ日本政府既ニ此償金ノ半額ヲ拂ヘリ而シ
償金條約以來八年ニシテ日本ノ形勢全ク一變シ
將軍ノ職ヲ廢メ王政ヲ復古シ尋テ遷都ノ舉アリ
且大名等甘メ其政權ヲ中心政府ニ委託シ以テ封
建ノ制ヲ一掃セリ天下未曾有ト云フベシ是ニ
於テ乎烏合ノ一國初テ合一ノ國トナリ外國條約
ハ國帝自ラ之ヲ確定シ昔日ノ如ク國內物議ヲ起
ス_トナシ而シテ國內ノ人民モ同心協力シテ昔日ノ
遊惰ヲ償ハン_トヲ務メ其進歩ヲ謀ラニ為ニ一層

開化文明國ノ扶助ヲ仰カシテ求ム而シテ其進
歩スルヤ之ヲ外國ノ獎勵ニ歸スルノ自然ノ理ナ
リ爰ニ下ノ關償金大額未_レ交付セサル者アリ而
此償金タル日本危急ノ際ニ當テ日本人ノ暴動ヲ
示サンカ為ニ需ル所ナリ然レ方今ニ至テハ其政
躰一變シテ外國人ヲ遇スル極テ厚シ然ラハ其未_レ
交付セサル償金ヲ要求セサルモ亦可ナランカ又
富強ノ各國既ニ其目的ヲ達スルカ故ニ一錢ヲ殘
サス悉ク之ヲ要求セサルモ亦可ナラン乎日本ノ
使節合衆國ニ來ルヤ其之ヲ遇スル甚々厚キヲ以
テ日本人ハ合衆國ヲ以テ懇切ノ一友人トセリ且
使節華盛頓滯留ノ際下院ニ於テ償金ノ殘額ヲ以
テ日本ニ還付スベキノ議案ヲ起シ同院ニ於テハ

悉ク衆議之ニ決スト雖議事ノ順序アルヲ以テ遂
ニ上院ニ達セシス議事院ノ處置斯ノ如クナルト公
私ノ論說悉ク之ニ應スルヲ見テ使節遂ニ合衆國
ニ於テハ償金ノ殘額ヲ需メサラン_レヲ決定セリ
千八百七十三年使節歸國ノ後外國公使等日本政
府ニ逼ルニ外國貿易ノ為ニ日本全國ヲ開カシ
テ以テセリ然レモ日本内地ニ於テ外國裁判ノ權
ヲ施スノ議アルヲ以テ未_レ全國ヲ開クノ期ニ至ラ
ズ此目的ヲ達センカ為ニ英佛荷三國ノ公使政府
ニ逼テ曰ク全國ヲ開カシハ下ノ關償金ノ殘額
ヲ得ベシト此時米國公使ハ他ノ公使ト共ニ之ヲ
需メス且日本政府ニ告テ曰ク本國政府ノ命ヲ得
ルニ非サレハ償金ノ殘額ヲ得ルヲ欲セスト然レ

日本政府此償金ヲ交付セザレバ常ニ外國ノ要求ニ苦ムヲ察シ遂ニ英佛荷ノ三國ニ其殘額ヲ交付シ爾後米國公使ビレグハム本國政府ノ命ヲ受ルニ及テ又之ヲ交付セリ

前條論スル所ノ事實左ノ如シ

第一〇日本ハ千八百六十三年ヨリ六十四年ニ至ル迄長州ノ謀叛及他ノ大名ノ不平ニ因テ國內騷争ヲ醸シ之ニ因テ長州外國人ニ對シ暴動ヲ為スト雖之ヲ制シ之ヲ罪スルハ能ハス

第二〇長州藩主下ノ關ニ砲臺ヲ築キ米佛荷三國ノ船ヲ砲撃セリ因テ此三國直ニ軍艦ヲ遣リ以テ大ニ此暴舉ニ報ヘリ

第三〇日本政府ハ長州ノ暴動ヲ認取セシテ深

ク之ヲ謝シ且米國公使ノ欲スル所ニ從テ償金ヲ出セリ(ペンダローク号ノ償金ヲ云フ)

第四〇前條ノ事既ニ終テ後米國公使荷佛曾テ長州ノ砲撃ニ遇ヘリノ公使及英曾テ長州ノ砲撃ニ遇ハズ公使ト共ニ謀テ下ノ關ニ軍艦ヲ派遣シ其砲臺ヲ破毀シ長州藩主ヲ哀ラシク請ハシム

第五 外國公使ハ日本政府ニ逼テ償金ノ事ヲ擔任ヤシメ且償金ヲ算定スルニ遙ニ現在ノ入費損失ノ額ヲ過キ且日本政府ノ資財ノ及ハサル額ヲ以テシテ到底政府ヲメ開港ヤシメントス

第六〇政府既ニ償金ノ全額ヲ交付シ之ヲ四國政府ニ分配セリ合衆國ニ於テハ此償金ヲ以テ悉ク此般ノ諸費ヲ償ヒ其高五萬弗ニ足ラス方今合衆

國政府ニアルモノ母子共ニ餘剩一百二十五萬弗
ニ至レリ此償金ノ由來ハ前ニ説示スル如シト雖
尚^ホ未^タ合衆國會計局ニ收メスレテ國務局ニ委託シ
以テ議事院ノ處分ニ任ス而シテ下院ニ於テモ既
ニ一旦此事ニ着意シ當時ニ當テ未^タ交付セサル償
金ノ一部ヲ返還スベキヲ議決セリ議事院ノ處
置既ニ斯ノ如クナルヲ以テ之ヲ日本ニ返還スル
ト雖理ニ於テ妨ナカルベシ若^シ此償金ヲ得ルノ目
的トスル所合衆國政府及其人民ノ入費損失ヲ償
フニアルキハ則^チ悉ク此入費ヲ償シヤ否ヤヲ檢査
シ且其未^タ償ハサル可ラサルモノアルキハ宜ク其
處分ヲ定ル是^レ議事院ノ職掌ト云フベシ然^レモ若^シ各
般ノ入費ヲ償フノ後其現在ノ損失ニ比例シテ不

當ノ餘剩アルキハ則^チ其餘剩ノ全額ヲ返還スルヤ將^ク其一部
ヲ返還スルヤ否ヤヲ熟議スル是亦議事院ノ職掌ナリ
若^シ此償金ノ目的トスル所日本政府ノ其己レカ義
務ヲ怠ルヲ以テ更ニ之ヲ遵守セシメントスルニ
アルキハ則^チ故ニ此義務ヲ怠タリレヤ將^ク内乱ノ
故ヲ以テ政府ノ其人民ヲ統御スル能ハサリレヤ
否ヤヲ檢査スル是^レ議事院ノ職掌ナリ若^シ故ニ其義
務ヲ怠ルトスルモ其償金ノ額其罪ニ對メ不當ナ
リヤ將^ク日本資財ノ多寡ニ比較シテ過當ナル哉且
方今ニ至テハ日本ノ人氣外國ニ對メ全ク一變ス
ルカ故ニ今日本ノ進歩ヲ妨ルカ如キ償金ヲ要求
スルヲ以テ策ノ得タルモノトナスヤ否ヤヲ檢査
スル亦議事院ノ職掌ナリ

前條記載セル乎ヲ以テ考ルニ此大額ノ償金ヲ算定スルモト日本政府ヲノ國ノ安危存亡ニ係ル各種ノ准許（港人等ヲ反シテ開ク）ヲ為サレメントスルニアリ故ニ今日ノ機會ヲ失セス此過ヲ改メ以テ合衆國ノ威風面目ヲ存スル亦議事院ノ職掌ト云フベシ

議事院ノ職掌ハ唯此金額ヲ日本ニ返還スルニアリ且其約束ヲ立ルト立サルトニ拘ラス之ヲ返還スベシ而シテ其約束ノ有無ニ就テ議論アラハ或ハ教育進歩ノ為メ或ハ其他緊要ノ目的ノ為ニ委托資金トメ之ヲ附與スベシ而シテ斯ノ如キ處置ヲ為スルハ公義面目兩立ツベク且合衆國人民ノ公論ニ因テ希望スル乎ナリ今之ニ反シテ貧國ヨリ

其人民教育及百工進歩ノ為ニ要スル乎ノモノヲ奪取スルルハ却テ我厚意ヲ損フベシ若シ之ヲ返還スルルハ是レ我善意ヲ盡シ更ニ日本ノ進歩ヲ推動シ且彼ノ日本ヲメ我寛裕信實ヲ示ス乎ノ開化ヲ信用セシムベシ

日本下ノ關償金附録

第一 一千八百六十三年第七月廿四日横濱在留

米國公使プリン外務長官「レウワルド」ニ送ル書

今回閣下ニ報知スル事件ハ實ニ悲痛スベキノ至
ニ堪ヘズ前ニ既ニ大名等敵對ヲ始メ今ニ至ルマ
テハ黨類多キハ白日ニ男女ヲ問ハズ兵器ヲ帶
ビザル者ヲ威懾シ或ハ屢夜ニ乘リテ襲撃セント
ス最早米國荷蘭佛國ノ國旗ヲ掲ケタル船艦ニ具
レハ率然之ヲ攻撃スルニ至レリ其敵對ノ極度
上レリト云フベシ客月二十五日午後支那在留米
人「ロツヤル」社中ノ所有小蒸氣商船「ベムブローク」号
内海ノ西口九州ト日本大島ノ間ニ横ハル下ノ關
海峽ヲ通行ヤントシ潮流急ニシテ進ムヲ得ス錨

ヲ下シタリ時ニ兩桅半船國旗ヲ翻シ「ベムブロー
クヲ經過シ海峡ノ東口ニ至リテ投錨セ、是ニ於
テ海岸ノ一砲臺ヨリ號砲ヲ發シ諸砲臺ニ恣セ
リ
翌廿六日午前第一時彼船「ベムブローク」ニ對シテ
發砲ヲ始メタリ必項アリテ巨砲十門ヲ載セタ
兩桅船「ランリッキ」号大喊シテ來リ「ベムブローク」ヲ
經過シ前ノ一船ニ傍テ投錨シカラ合セテ「ベムブ
ローク」ニ對シテ砲發シタリ此夜幸ニ黑暗ナリ「ベ
ムブローク」ハ迅速蒸氣ヲ起シ長崎ニ航スルヲ
止メ逆行シテ豊後海ヲ經大平洋ニ出ルヲ得タリ
右ノ報知ハ外國奉行江戸ヨリ余ニ送リシモノニ
テ本月十一日午後コレヲ得タリ書中「ベムブロー

文部省

クハ該地近海ニ於テ沈没セシ由ヲ記載セリ故意
ニ虚言ヤシモノカ或ハ暗夜ノ故ニ全ク誤認セシ
モノカ余未タ之ヲ詳ニスル能ハス「ベムブローク」
ハ米國船ナルヲ疑ナシ同日午後「ロツセル」社中ヨ
リ書翰ヲ得タリ該船ノ船將及士官ノ口供ヲ添へ
備サニ事情ヲ書セリ「ロツセル」口供并明細書ノ寫 第一号
第二号
ハ「ロツセル」書中ニ封入シテ閣下ニ送呈ス
翌日奉行ヲ招キ口供ヲ其前ニ於テ朗讀シ彼
擊シタル二船ハ日本政府ノ旗章ヲ掲ケテ「ロツセル」
ヲ知ラシメタリ余彼ニ問フ政府ノ兵船ナリヤト
彼答フ長門侯ノ船ナリ但シ大名所有ノ船艦ハ本
名ノ旗章ヲ前掲ニ掲ルハ我政府ノ規則ナリト是
ニ於テ余彼ニ「ロツセル」社中々損害ヲ償ハレシム

文部省

要求スル旨ヲ告ケ且、我國旗ニ對シテ發砲セシム
不敬ニ至テハ當ニ問責シ満足ヲ要求スルアラシ
トスルヲ面告セリ余ハ「ワイヲミン」ニ衆組ニ長
崎ニ赴ントス故ニ歸着ノ後日本政府ヨリ談件ニ
關セル報答ヲ得ニ「ヲ」企望セリ而シテ「ワイ
ン」ノ艦將「マクドール」ガルトニ日本政府ト談判
ニ出頭アラシ「ヲ」ヲ請求シタリコノ應接竟リテ後
ニ余ハ「マクドール」ガルト會合シ如何カ處置シテ其
宜ニ適スベキヲ相議ス「マクドール」ガルトハ直ニ下ノ
關ニ趣キニ艦ヲ攻奪セン若シ之ヲ拒カハ直ニ擊破
ヤンノミト決斷セリ余カ策モ亦此外ニ出サルヲ
以テ「マクドール」ガルトノ意見ノ余カ意ト符合スルヲ
満足セリ是ニ於テ本月十三日ノ午前「ワイヲミン

グハ日本政府ノ給供ヤル引水人二名ヲ載テ凡、六
百里ヲ隔タル下ノ關ニ向テ出帆シタリ
同十五日佛國公使ノ報知ヲ得タリ佛國皇帝ノ砲
艦「ケンチヤン」下ノ關海峽ニ於テ曩日米艦ヲ砲擊
ヤレニ艦及砲臺ヨリ砲擊セラレ殆ンド沈没ヤン
トヤレガ幸ニシテ長崎ニ達スルヲ得タリト
下等水師提督「デュール」スハ大砲九十五門ノ蒸氣中
軍艦「ヤミラミス」及大砲四門ノ「タンクレー」ド
ヒ十六日ノ午前出帆セリ將ニ港ヲ出シ、ル
燒倅ナル哉荷ノ軍艦「メツサ」十六門ニ遇フ此軍艦モ
亦去十一日下ノ關海峽ニ於テ砲擊セラレシニ由
テ艦將「カセム」ガロイ「ト」ニ其委細ノ「ヲ」ヲ聞キ彼
攻撃ヤレニ艦及砲臺ノ位置ヲ指示スル圖ヲ得

「メツサ」ノ着港セルニ依テ我輩ハ委細ノ一ヲ聞ク
談船ハ東客荷國ノ代理惣領事「デ」デグレソ、バンパ
スプロエックヲ以テ本月十日長崎ヲ出帆シ途ニ「ケ
ン」チヤンニ出會シソノ砲撃セラレシヲ聞キ
ト雖荷人自ラ以為ラク我國日本ト交通スルニ、
五十年我國旗ハ日本人ノ普ク知ル所ナレバ恐ラ
クハ砲撃スルコトアル可ラスト西口ヨリ海峡ニ
進入シ既ニ峡口ニ横ル一大島ニ近寄ラントスル
時豈ニ料ランヤ談島ノ砲臺ヨリ號砲ニヲ發シ忽
チ數所ノ砲臺ヨリ之ニ應スルニ八發ヲ以テセリ
メツサハ一時間六里ノ速力ナルニ潮ハ一時間五
里ノ速力ナリ故ニ船行クヲ甚タ緩ニシテ漸ク島

ヲ經過セシニ亦彼船及砲臺六所ヨリ砲撃セラル
ト一時半砲丸船身ヲ射彈スル十四回ニシテ即死
スル者四人傷ク者五人ニ至レリ五發ハ水面線ニ
當リ「メツサ」ハ殆ント破船ヤントシタリコノ戦争
中日本船ハ長州ノ旗章而已ニテ別ニ國旗ヲ掲ケ
ズ「メツサ」モ奮激快手返砲セリ敵船ノ死傷多カル
ヘシト想像スレド其詳ナルヲ知ラズ
砲臺ハ海峡ノ北岸險阻ナル岩頭ニアリ水面
高キ「メツサ」凡ソ七十「フート」ナリ一砲臺ゴトニ
三砲ヲ備フ砲ノ量目ハ十二磅二十四磅三十五磅
ナリ砲臺ハ巧ニ陰蔽シテ海上ヨリ見ルベカラズ
其用ヲナス「ハ」誠ニ驚クニ堪タリ是故ニ余ハ甚
憂虞セリ「ワイ」ラミン「グ」ガ無事ニ下ノ關ヲ通行ス

那 省

長崎ニ達シ得ルヤヲ此港ニアル各國ノ海軍ニ官
モ亦憂虞ヤザル者ナシ

然リト雖余ハ素ク英佛ノ水師提督ニ應愛リ請
フヲ欲ヤズ英佛モ亦助ケズ然レモ天ノ幸ニ由リ
ワイヲミンダハ二十日朝歸港セリ是ニ於テ余如
クテ深憂ヲ放散スルヲ得タリコンマンドルマ
ドールガルノ余ニ口演セリ閣下余ガ海軍長官
ニ送リシ申報ノ寫ヲ見之ヲ知ルベシワイヲミ
ンダハ豊後海ヲ經テ本月十六日東口ヨリ海峡ニ
進入シ既ニ海峡ニ近寄ラントスル時第一砲臺ヨ
リ號砲ヲ發セリ既ニ岬ヲ回リタル時大砲四門ノ
蒸氣船ヲランスフェールド十門ノ兩桅船ヲリック
又四門ノ一船下ノ關ニ對シテ破泊スルヲ見ルワイ

ヲミンダハ國旗ヲ翻シ前進スルニ砲臺各發砲シ
タリ然レモワイヲミンダハ一砲ヲ發マスレテ右
三船ニ近ツキテ進ミタリ

ワイヲミンダハ砲手ノ最熟鍊ヤル砲臺ヲ避ケ陸
地ニ接近スルヲ以テ砲丸ハ船上ヲ通過シ唯綱具
ヲ破損ヤシノミ引水人ノ艦ノ陸地ニ近ツキ洲沙
ニ膠ヤンコトラ苦言スレトモカピテン、マクド
ガル聞カズ船ヲ進メテ彼三船ノ間ニ突入シ久
ク砲戰シタリワイヲミンダハ砲丸ヲ受ルヲ終
ニ直徑十一インチノ爆彈三個ヲランスフェールド
ニ打込ミ第三ノ爆彈ハ蒸氣釜ヲ破烈シタリ故ニ
ランスフェールドノ陸地ニ向テ退キタリ兩桅船ヲ
リックモ亦大ニ破損シワイヲミンダハ戰場ニ離

レテ去ラントスル時ハ殆んど沈没セんとスル景
況ナリ於是「ワイミング」ハ散弾及爆弾ヲ兩ノ注
リガ如ク砲壘ニ打掛ケ難ナク海峡ヲ通リテ歸港
ヤリ初メ「ランスフールド」ハ桅梢ニ日本國旗ヲ掲
ケタリレガ敗北ノ後忽チ之ヲ却セリ他ノ二船ハ
日本國旗ト長州侯ノ旗章ヲ掲ケタリ此役ヤ戰勝
ノ功ヲ奏セシト雖水夫四人即死シ七人ハ傷ケラ
レ其一人ハ後ニ死ス余甚々之ヲ悲痛ス「カピテン」
「マクドールカール」ノ航海海戦ノ術ニ長ゼレニアラズ
ンバ死傷更ニ多カルベシ實ニ「マクドールガール」ノ功
ト云フベシ

「ランスフールド」ハ英國ノ「ジャージ」マジソン商
社ヨリ十一万五千弗ニテ賣タル六百噸積ノ奇麗

ナル蒸氣船ナリ兩桅船「ランリッキ」ハ往年鴉片貿易
ニ用ヒテ「レタル」モノニシテ砲窓ハ十八ナレモ今
ハ大砲十門ヲ備ヘタリ是亦同社ヨリ二万弗ニテ
賣タルモノナリ兩桅半船ハ肥州侯ヨリコレヲ長
州侯ニ賣リシモノナリ

荷ノ惣領事余ニ告テ曰「ワ「ランスフールド」ノ蒸氣
船破烈ヤシ時水夫湯潑死シ又ハ悶死スル者四十
人ト税關官吏等カ話スルヲ惣領事ノ雇人カ聞
リト
水師提督「デュレス」今朝「ヤミラミス」号船ニテ入港
セリ同氏ハ本日「ミラミス」朝下關海峡ニ達セリ然
レモ同氏ノ乗船「ミラミス」甚重載セルヲ以テ深
入セズ只「ダンクレー」ド一艘第三砲臺ノ前ニ進

水師提督^テレ^レ砲臺ノ在ルヲ知リ峽外ニ
投錨シ烈シク發砲シ百五十人ヲ以テ上陸シ一砲
臺ヲ奪取リコレヲ毀テ火藥庫及候館ヲ爆壞シ亞
彌陀^ダ峰^ミ村ヲ燒ケリ此村ニハ歩騎兵數千屯集シタ
レ氏烈ニキ守戰ハナサバリケリ
砲臺ノ一ニ於テハ怒潮ノ為ニ困迫シタル軍船
ト戰フキノ指揮語ヲ洋字ニテ書セシモノアリ佛
人ハ兩桅半船及蒸氣船ヲ見サリシ恐ラケハ此時
二船共ニ曲浦ノ内ニアリシナラン併シ沈没シタ
ル兩桅船ノ帆桅ハ見エタリ
コノ戰爭中南岸ノ地ヲ領セル大名ノ砲臺ヨリ發
砲セガリシハ實ニ幸ト云フベシ若^レ兩岸ヨリ夾擊

セラレレナテハ我軍艦ハ殆ント危ヲ脱スルコト
難カリシナリ
各國暴動ヲ受ケタル報知ハ一度ニ此港ト達セザ
ルヲ以テ各國一同力ヲ協テ戰フヲ得ス故ニ吾輩
ノ欲セシ如キ充分ノ報酬ヲナスヲ得ザリシナリ
然レ氏各條約國公使皆以為ラク至急着手セシハ
却テ都合能シテ平和ヲ保存スルニ便利ナルベシ
ト
大君我各國ト交際スルヲ誠實ニシテ京都ニ於テ
ハ欺騙ヲ以テ處置セバ彼ソノ職權ヲ保持スルニ
堪ベシト吾輩ハ信ズ然レ氏當今吾輩ハ唯暗中ニ
物ヲ摸索スルガ如クナルノミ
ワイヲミン^グノ舉ニ付簡略ニ各國公使ハ余カ報

知セシ書翰寫第三号及四号并荷蘭ノ代理惣領事ヨリ「メ」ガ「サ」ノ舉動ニ付余ニ報知セル書翰譯第五号ヲ封入ス

第二 「ロツセル」社中ノ申稟

六月十九日内海ニ於テ日本國政府ノ旗章ヲ飄ヤル軍艦ヨリ當社蒸氣船「ベム」グロトク「ク」攻撃セラレシニ付キ受ル所ノ損耗左ノ如シ

一大洋ニ出テ「ン」ガ為「ハ」ニ不案内且己ムヲ得スシテ迂遠ナル線路ヲ通行セシニ由テ延期スル「ハ」五日ナリ一日三百弗ノ損耗トシテ合セテ千五百弗ナリ

一長崎ニ達スルヲ得サルニ由テ乗客并船貨ノ損耗六千五百弗ナリ

一危難ヲ被リタル士官及水夫ハ分配スベキ報謝金二千弗ナリ

惣計一万弗也

千八百六十三年七月四日

支那上海

「ロツセル」社中

第三 一千八百六十四年八月十日神奈川在留米國公使「ブ」リ「ニ」外務長官「レ」ワ「ル」ド「ニ」送ル書

江戸府ニ滞留スル「ハ」三週間日本政府ニ討求スベク指令セラレシ「ハ」談判スル「ハ」ニ於テ成功ヲ得本月五日此地ニ歸着シタリ余熟ラ考フルニ當時日本海ニアル我米國軍艦「ハ」「メ」「ム」ス「タ」ウ「ン」一艘ナレバ武力ヲ用ルハ甚不便ニ属スルヲ以テ平和ノ術ヲ以テ談判リ談判セント決意セリ日本政府ハ既ニ一年前ニ承諾シ且約定セル我政府ニ「サ」フ

ベキ償金并「ベ」プロ「ル」賞金ヲ拂フ「ル」際限ナ
ク日延スル主意ナルハ明了ナリ今又該額ヲ長州
侯ヨリ募集セ「ル」ヲ請求セリ
公使館ニ對シテノ償金ハ既ニ拂ハレタリ初ノ日
本政府ハ我政府ノ請求ヲ承諾スルヲ耻辱ト認メ
シト雖今ハ其請求ノ公正ナルヲ明許シ猶豫ナ
ク之ヲ承諾シタリ而シテ日本政府ハ余カ送付シ
タル書翰ニ端書シテ還付セリ曰ク九月五日神奈
川奉行ニ「ベ」ム「グ」ロ「ク」償金ノ元利一万二千弗閣
下ニ交付スベク命シタリ且閣下ノ書翰ニ記載ア
ル日限ニ交付セザルキハ政府入税ノ内ヲ以テ該
金額相渡スベシ數月前ニ日本政府ニ迫ルニ利金
ノ事ヲ以テセリ然スレハ元金ノ拂ヲ急濟セ「ル」

ヲ震レバナリ

又日本政府余ガ書翰ニ端書シテ還付「ル」曰ク此
地ニ於テ貴國都人ノ凌辱セラレシ「ル」ニ付テノ願
望ヲ三十日以内ニ落着シ閣下ニ不満ヲ抱カザラ
シムルヲ能ハザレバ魯國皇帝ヲ申人ト「ル」テ裁斷
スベシト
余歸着後「カ」ピ「テ」ン「プ」ラ「ハ」スニ送リタル書翰寫草
ハ号ヲ封入ス同氏ノ余ニ貴重ナル輔佐ヲ與ヘシ
「ル」余カ請求セシ「ル」ハ何事ニヨラズ容易ク一致セ
ラレシコト商議ニ於テカノ及「ル」バ「ル」ケハ余「ル」助ケ
ント配慮セラレ「ル」ニ於テハ余實ニ欣喜「ル」堪ヘ
ザリシナリ又同氏ノ余ニ給セラレシ衛兵ハ盡ク
品行正シク余「ル」滞留「ル」一日モ不安ノ思ヲ為シ

タルトナシ彼等再ヒ来ムシキハ余ハ甚タ欣ビ
タリ又彼等ト日本衛兵トノ間終始懇篤ナリシハ
幸ト云フベシ

第四 一千八百六十四年八月八日神奈川在留米
國公使アリシカピテン、プラハスニ送ル書

合衆國大統領ヨリ命マラレタル日本政府ニ討問
スベキ要件ハ首尾能ク整ヒ満足セリ余コノ成功
ヲ羨ヤシハ專ラ貴下ノ余ヲ輔佐ヤシニ由ル余深
ク貴下ニ謝ヤザルベケンヤ現今我軍艦ヲ日本海
ニ碇泊スルモノ少ナキヲ以テ安穩ナル辨理ノ處
置ヲ為セリ若シ軍備アリシナラバ余ハ既ニ決意ヤ
シ如ク處置シ預メ冀望ヤシ知ク成功ヲ得タルベ
シ然リト雖幸ニ老中余ニ告ルニ余カ江戸滞在申

無難ヲ保スル能ハザルヲ以テ貴下ニ請
求シ衛兵ヲ得タリ因テ速ニ商議ヲ決スルヲ得タ
リ余偏ニ貴下ノ猶豫ナク余カ請求ヲ承諾セラレ
シヲ謝ス併テ貴下ノ給ヤル士官及衛卒ノ善行ヲ
外務長官ニ申報ス余カ江戸ノ中心ニ在リ三週
其間彼等日本官吏及兵卒ト交ルニ常ニ辞色ヲ好
クシ未曾テ交情ヲ敗リシトナシ余豈ニ感賞セザ
ルベケンヤ

辨理公使
ロハルト、エツケ、プリシ

在横濱合衆國軍艦「ゲエームスタウン」号ノ船將
ハシス、コト、プラハ、ス君 貴下

第五 日本外國奉行甚く、列顛佛蘭士令衆國及
尼達蘭ノ公使ニ送ル書譯文
去歲長州人外國船ニ對シテ發砲セシ一件ニ付五
月三十日附ノ貴翰ヲ受領セリ
過日諏訪因幡守及松平縫殿頭ヲ遣ハシ長州事件
ハ決シテ等閑ニセサルノ意ヲ閣下ニ表明セリ然
レモ今國內人心洶々タルノ際急ニ處置ヲ求ムル
ルハ恐ラクハ大害ヲ醸生シ其極遂ニ各國ト我日
本國ト不知ヲ生ヤント深ク憂慮ス故ニ好機會
ヲ待テ裁決ヲナサント欲ス希クハ諸君暫ク諒件
ヲ余等ニ委託アラントラ
第六 外國公使等出兵條約ヲ手記
下名ノ條約國公使等各國海軍士官本月十二日横

濱ニ會同評議シ同日押印セル細書ヲ商議スル
タノ茲ニ會合シ以テ約束ヲ定ム其議決トノ如シ
第一條 居留地防護ノ責任ヲ全ク解免スルヲ前
書海軍士官ニ報知スル
第二條 去六月廿日附ヲ以テ下名各國公使ノ布
告ヤル計畧ニ從ヒ成ルベク急ニ下ノ關海峽ニ向
ヒ長州侯ノ砲臺ヲ毀壞シソノ軍器ヲ奪取リ侯ヲ
シテ再ビ抵敵スルヲ得サラシムベク前書海軍士官
ニ請求スルヲ并今回ノ處置ハ永ク延引スルルハ
不都合ヲ醸スベキ位地ニアルヲ彼等ニ報知スル
第三條 假令長州侯大軍強迫ノ勢ヲ懼レ抵敵ヤ
ザルトモ砲臺ヲ毀壞シモクハ將來ノ抵敵ヲ防グ

ラ保スルニ足ルト考フ一ハ前書海軍士官等隨
 意ニ處置スルヲ許ルス
 第四條 何事ヲ抄テ長州侯ト談判セサルベク
 前書海軍士官ニ請求スル
 第五條 今回征討ノ事ハ海賊或ハ法外ニ置レタ
 ル者ヲ膺懲スルモト見做シ成ルベク別種ノ葛
 藤ヲ生ヤサラントニ注意シ大坂近海通行ノ節ハ
 靜ヲ主トシ妄ニ動兵ノ機ヲ見ハサバルベク前書
 海軍士官ニ言會ル
 當地ニテ考按セシ如ク目的ニ達スレバ速ニ自由
 通行ナシ難キ船艦ハ安全ニ横濱ニ歸港セシムベ
 ク前書海軍士官等ニ請求スル
 此八月十五日印ヲ押ス

ルーザ ハンド アルコック
 レオン ローチス
 ロバルト エッチ プリン
 デーテグ レッフ バンボルス プロエック
 第七 一千八百六十四年十月一日神奈川在留米
 國公使「プリ」ニ外務長官「レワルド」ニ送ル書
 船隊ノ一部下ノ關ヨリ歸港ニ報知ヲ得ル迄ノ如
 シ去ル九月四日六日七日八日ニ於テ長州砲臺ノ
 下ノ關海峡ニ臨ノルモノハ盡ク之ヲ毀壞シ火藥
 庫ヲ彈壞シ爆彈及散彈ヲ海ニ投シ砲銃七十許ヲ
 奪取リタリ而シテ長州侯ハ約束ヲナサズ降伏シ
 各國公使ノ要需ニシテ額ヲ償フテ承諾セリ
 エームスタダ「松」ノ旗ヲ「ペヤ」ニ米國傭船「タキ

ヤン号ノ指揮官トシテ人ニ功勞アリ因テ同盟船
隊ノ惣指揮官アドミラル、クーパー持書ヲ以テ謝
辞ヲ演ベ勝敵ノ号トシテ該船ニ三十二磅ノ大砲
ヲ交付セリ同氏ノゲエームスタウン号ノ三十一磅
大砲ヲ用ヒシ方法ノ詳細ニシテ功効アリシハ之
ヲ感賞マザル者ナシ英船ノ傷者ハコロノゲエーム
スタウンニ乗セドクトル、ベグダーニ托シ治療セリ
余二三日中ニ此事件ノ明細書其他種々ノ筆記ヲ閱
下ニ送呈ヤント欲ス然ルキハ從來送呈セル書翰
ノ意ヲ證據トナシ閣下ヲシテ今回ノ征討ハ必要
己ムベカラズ而シテ禍ヲ轉シテ福トナスノ時ヲ
得タリシヲ知ラシメンコトヲ冀望ス惣督クーパー
歸港セシヤ香ヤ各國公使等日官吏ト會合シ次

ノ四ヶ條ヲ高議スルアラシム
一大君ヲシテ逆黨ノ呼業ヲ非トスル公告ヲナ
サシムルコト
二天皇條約ヲ批准スルコト
三天君長州ニ代テ征討ノ入費ヲ償フコト香ヲガ
レバ下ノ關ヲ開港スルコト
四下ノ關海峽ニ臨メル丈ノ土地ハ公領トナス
第八 神奈川在留米國公使アリシ一千八百六十
四年十月廿九日外務長官「ワルド」ニ送ル書
日本政府ト盟約書寫第一号ヲ封入ス余カ關下ニハ
電報ハ六十号ニテ承知セシメテ時ハ日本政
府ハ口上ニテ承知セシメテ演ヘタリ余カ之ヲ端
足スルハ單一ニテ念ナシト云フヲ得ス長防

文部省

ノ領主毛利大膳大夫 敬討ニ依テ人心沸騰シ大
君ヲレテ信義ヲ以テ外國條約ヲ確守スルヲ容易
ナラザラシメカ故ニ此回大君ヲ各州ノ需ニ
從ヒレ其意ハ各國公使ノ確定セル處置ヲ戰々慄
カトシテ承諾セシノミ并ニ之カ為ニ大君ヲレテ
勇敢ナル長州侯ノ大膽不敵ヲ恐懼スルヲ免レシ
ノタリ
大君暇心ノ臣僚ト議シコロ條約ヲ應諾ヤレハ大
君益怯弱ニナリ危難ニ迫ラントラ恐レハ依レ
リ然レハ決シテ之ヲ緊要トヤザルベカラズ如何
トナレバ内幕ニ應諾ヤレモノニアラズ即公然布
告ヤルモノナレバナリ且今回吾輩ノ討求ノ談判
ヲナヤレハ唯正理ニ合フタ 臣己ナラス之ヲ為

サヅルハ勿論延引スルモ策ニコラズ即條約上ニ
テ得タル權ヲ失フト云フベシ盟約ノ條中ニ云ク
金ヲ得ルハ決シテ條約各國ノ目的ニコラズ唯冀
リハ日本ト交際スル猶益親睦ニナリ互相ノ安全
利益ヲ増加センコトヲ緊要ノ目的トヤンコト云云
ハ余ガ最嘉納スル所也レテ條約各國ノ榮譽トス
ル所ナリ若唯金ヲ以テ罪ヲ償フニ足レリトスル
説流行スルナラハ不祥豈コレヨリ大ナルモノヤ
ランヤ假令日本政府償金及雜費ヲ拂ヒ或ハ海關
稅ヲ高クシ或ハ別策ヲ設ケ損失ヲ償ハントスル
モ余ハ敢テ不滿意ヲ抱カザラント欲ス
一千八百六十三年五月ニ英國政府ヨリ償金ヲ催促
シタル時日本政府拒ミ 故ニ英國政府ハ強迫

セントスルニ依ニ滿地
船ノ借料等忽チ非常ニ漲騰シタリ日本政府終ニ
拂濟シ後ハ稍低下スト雖未全ク初ニ後ニハコノ
騷動ニテ貨物載回ノ稅ニテ引受ケタル損耗ト爾
後連綿輸入品ニ課セラレタル稅トヲ算計スレハ
日本政府ノ拂フタル罰金ニ超乘セリト或ル才智
アル商人ノ算計ナリ余等未タ日本事務官ニ面會
セザル前ニ余ハ英國公使ト同意シ償金ハ二百萬
弗ト取極メタリ而シテ各國コレニ關係スルモノ
ノ間ニ配分スルヲハ難事ニアラザリシナルベシ
然レモコノ役ニ於テハ戰功ヨリハ初ニ同心奮
發セシ功ヲ以テ重シトスル理アルベキヤ否ニ付
テ論議起リタリ余ハ既ニ吾政府ノ同盟艦隊ニ與

ヘタル心慮ノ扶助ハ事實ノ補助ニ過キシヲ以テ
此説ヲ抗爭スルヲ欲セザリシ故ニ余ハ此議ニ於
テハ本國政府ノ指令ニ任セ若シ各國要求スル所ノ
償金拂方ニ付テ紛議起ルアラバ各國ト偏頗ナキ
位置ヲ保ヤンヲ希望ス余ハ又佛國皇帝陛下ノ
公使ガ償金ノ額ヲ三百萬弗ニ極メント發議セラ
ルニ依テ之ニ同意セリ如何トナレハ余以為ラク
償金多クレバ日本政府ハ一港ヲ開テ以テ現金ノ
拂ラ償ハシムル方ニ導キ易シト若シ大君開港ヲ許
サズ償金及雜費ノ代リニ一港ヲ開クヲ能ハサル
場合ニ至テ談議三百萬弗ヲ要求スルモ亦過多ニ
ハアラザルナリ若シ大君開港ヲ許サバ金額ハ適度
ニ減シ拂ハ一應ニスルカ又ハ年賦ニスルカ同盟

日本

四國ノ選ニ從フベシ
孰レノ場合ニ至ルトモ適宜ノ償金ヲ要求スルハ
論ヲ俟タザルベシ

第九條約

大不列顛法蘭西合衆國尼達蘭四國ノ公使曩キニ
長門周防ノ國主毛利大膳ノ敵對ニ依テ大君ヲシ
テ昭ント各國ト信義ヲ固クシ條約ヲ守ルコトヲ得
ガラシムルニ至レリ因テ止ムヲ得ス同盟ノ師ヲ
下ノ關ニ出シ該侯ノ外國船舶ヲ破毀シ貿易ヲ阻
過ヤンガ為ノ築造ヤシ砲臺ヲ破滅ヤント決シ又
大君ハ此反逆大名ヲ譴責スル任アリバ損害及ヒ
出師ノ入費ヲ償フハ大君政府ノ擔任スベキコト
ス

下名各國公使及日本大君ノ全權若年寄酒井飛彈
守一千八百六十三年六月以來毛利大膳條約各國
ノ國旗ヲ凌辱ヤシ數回ノコトヨリ起サタル不和ヲ
落着ヤシノ并ニ下ノ關征討ニ付テ償金及雜費ヲ
定メシコトハ目的ヲ以テ會盟決議スルコトノ如シ
第一條 日本ヨリ四國ニ拂フベキ金額ハ三百萬
弗ト定ムコトノ金額ハ下ノ關償金及ヒ出師ノ入費
等盡ク此内ニ含ム

第二條 今回會議ノ決議ヲ各本國政府カ批准セ
レテ大君政府ニ報知スル日ヨリ該額ヲ六ヶ年
ニ分割シ毎年五十萬弗ツ、拂フベキコト
第三條 金額ヲ請取ルハ決シテ右四國ノ目的ニ
アラズ日本ト交渉ヲ益親懇ニスルノ基礎ヲ固ク

レ互相ニ満足シ且利益アル位置ヲ得シテ緊要ノ
目的ナルニ依テ若大君殿下該額ノ金ヲ拂フノ
代リニ下ノ關係シクハ他ノ相當ノ法ヲ明キ以テ
損害ヲ償ハント欲セバ受ルト受ケザルトハ右四
國ノ選ニ任スベシ否ラザレバ前文約定ノ如ク
金貨ニテ償ヲ求ムベシ

第四條 コノ會盟條約ハ當日ヨリ十五日以内ニ
大君政府此ト批准スベキ
約定ノ證トシテ英文并ニ和文ヲ以テ條約ヲ書シ一
千八百六十四年十月二十二日即元治元年九月二
十二日横濱ニ於テ五國ノ全權公使コレニ捺印ス
但シ英ヲ以テ原文トスベキ

西井飛彈守

大英國皇帝陛下ノ特命全權公使

ルーサーホルドアルコック

佛國皇帝陛下ノ全權公使

レオニローキス

水國辦理公使

ロバルトエツチプリン

尼達蘭國皇帝陛下ノ總領事兼代理公使

デググレフバンブロスフロエック

第十 記録

下名各本國政府ニ代テ大君殿下ノ政府ト會議シ
長門侯ノ抗敵ヲシヨリ起リタル償金諸雜費等合
テ三百萬弗ト定メ大君政府ヨリ拂フベキヲ盟約
シ因テ布告ス巴黎府ニ於テ大君ノ理事官ト會議

レ佛國皇帝陛下ノ政府ハ「ケンチヤ」号船ヲ砲撃
セラレシ償トシテ十四萬弗ヲ大君政府ヨリ請取
ルベキ約定ヲ基礎トシコノ額若シハハ額タリ
トモ要求スベキ理アリ況又合衆國及ヒ尼達蘭ハ
長州侯ノ為ニ官船及ヒ商船ヲ損害セラレタル
ハ佛國ヨリ一層甚シキヲ以テ同様ニ償金ヲ要求
スベキ權アルガ故ニ日本政府ノ拂フベキ額三
百萬弗ノ内幾程拂ハシムベキヤヲ決スルハ米荷
二國ノ政府ノ權タルベシ償金ノ代リニ内海ニ於
テ一港ヲ開カシムルヲ前名政府等多分得ベキ
トシ其處分ニ於テハ下名ノ權限トシ且各國ヲシ
テ公平ノ割前ヲ得セシメニガ為メ各國ヨリ征討
及ヒ諸港防禦ノタメ出シタル公數及ヒ軍器水夫

ノ數ヲ記スル海軍指揮官ノ口書并ニ兵隊ノ數ヲ
記スル陸軍指揮官ノ口書ヲ茲ニ附録ス

一千八百六十四年十月二十二日橫濱ニ於テ

ルーサーホルドアルコック

レオン ローチエ

ロバルトエツケプリン

デデグレッフバンプロスブロエック

第十一 一千八百六十四年十月二十八日神奈川
在留米國公使プリン外務長官シワルドニ送ル

書

先便ヲ以テ「タキヤ」号蒸氣船ヲ備入レシヲ申
報シタリ今回「ノ」備船約書寫第一号ヲ封入ス該
船ノ持主次ノ郵便ニテ為替券ヲ送致セバ政府ハ

金貨ニテ九千五百弗拂フベシ併右為替券ハ外務
省又ハ海軍省ニ向ケ送致スルヤ余ハ確知レ得
ルヲ以テ兩省熟レカ適當ノ所ニ於テ請ケ定算
アラントラ冀望ス
別紙第二号ノ通り石炭ノ代ハ日本政府ヨリ拂フ
タル償金ヲ立替ヘ船主ニ千八百四十八弗ヲ拂フ
タリ其故ハ兩替ノ減損ヲ省ニガ為ノナリ然ルニ
因テ惣備賃海軍省ヨリ拂フベキトヤバ該額千八
百四十八弗ハ外務省ヨリ該省ニ償還スベキモノ
トス然ルキハ兩替スルコ付キテノ損減ヲ受ケザ
ルベカラズ
該船若破船沈没等スルキハ價七万五千弗ト取極
メタリ爾後此船ハ十万八千弗ニテ賣售セリ此船

備期限ノ末期ニ於テ凡ソ二週間許英國政府此港
マテ軍勢ヲ召還スルタメ備フタリ此賃トシテ同
國政府ヨリ七千テールヲ請取り其間船賃ヲ運搬
スル權ヲ船主ニ許セリ夫故ニ「カピテン」ハ「ラ」
ト余ト談合レ取結タル備船條約ニ於テ「聊」カ異
論アラザルベシト信ス
前キニ日本政府ト決セラル盟約ニ依テ日本政府ハ
「タキヤン」及「ヒ」此港防護ノ「チエーム」スタウンニ船ノ入
費并ニ償金ヲ拂フベキ等ナルガ故ニ全体ノ事務
ハ貴省ニ於テ取扱フベキ任アリト思定レ且余カ
處置セラル各件モ嘉納マラレントラ望ム
第十二 横濱碇泊合衆國船「チエーム」スタウンノ
船將「カピテン」「ラ」井「ス」ミ「ス」トル「パ」リニ送ル

書

貴下ノ請求ニ從テ報告スル左ノ如シ
 去ル九月日本海岸ニアル合衆國船隊ハ此船及
 キヤンヨリ成立セリ此船ニハ水夫二百十八名及
 大砲二十一門ヲ備ヘタキヤンニハ此船ヨリ水
 夫十八名ト大砲一門ヲ移シ共ニ水夫ハ五十八名
 トナレリチエームスタウン、此港ノ防護トシ
 キヤンハ下ノ關征討ニ加ハリタリ
 一千八百六十四年十月二十一日
 第十三 一千八百七十二年三月二十日華盛頓府
 海軍省ノ「ミストルロバル」ニ外國事務委員長
 「ミストルロバル」ニ送ル書
 本月十五日瑞貴翰拜受下ノ關ノ役ニ付起リタル

雜費死亡損害ノ件委曲承知モタリ一千八百六十
 三年七月十六日海軍大將「マクドール」ノ率
 合衆國船「ワシオミング」ト日本船及「砲臺」下
 ノ關ニ於テ戰ヒシ時「ワシオミング」ハ船身ヲ射彈
 ヲラレ、ト十一回ニシテ烟管及綱具ヲ損タル
 甚シク死スル者四人傷ク者七人其内一人ハ不日
 ニ死シタリ
 吾輩未タ「ワシオミング」ヲ修復シ及ヒ損害ヲ補フ
 價ハ幾許ニ當ルベキヤ特別ノ精算ヲ得ズト雖凡
 ソ五千弗ト假定ス戰フ一時間彈藥ヲ費ス「五
 千六百十九弗」ナリ故ニ惣入費ヲ一万百六十九弗
 ト積ルベシ
 一千八百六十四年九月ノ戰ニハ合衆國ハ持ニ真

ノ軍艦ヲ出サ、リレナリ唯「ダキヤ」一被ナリ此
船ハ合衆國公使同盟艦隊ト協力セシムル為メニ
一ヶ月九千五百弗ニテ備スレド、石炭代ハ合衆國
約ト合衆國海軍ノ旗手「フレドリッキ、ピヤソ」ニテ
テ之ニ將タラシメ九月二十二日ニ該艦ノ管掌人
ニ還付シタリ交戦續ク、九月五日乃至同八日凡
テ滿州河ノ間「ダキヤ」爆彈ヲ放發スル十八個同
盟艦隊ノ惣數ハ「ダキヤ」ニテ合テ共ニ十八艘ナリ
「ダキヤ」ノ水夫傷ヲ負フタル者二十三人、ト
「フレドリッキ、ピヤソ」ノ報知ヤシヨリ外ニ當省ハ
未タ死傷損害ノ報告ヲ得ズ
「ワイオミング」ガ戦フタル後二三日ニ佛國艦隊ノ
「タニク、レー」ト下ノ關海峽ノ砲臺ト戦ヒ三人ヲ亡

ヘリ「ダキヤ」ノ費ヤシタル軍用品等ノ價ハ大概
二百六十弗ナリ
第十四 一千八百六十六年一月十九日巴黎在留
米國公使「ロチエ」ミストル、レワルドニ送ル書
當府在留英國使節一千八百六十五年十二月十九
日附ヲ以テ日本償金交付ノ方法ニ關シテ書ヲ送
レリ其馬^{第六号}ニハ既ニ閣下ニ送呈シタリ今回
ハ「モッス」ル、ドロイヨンド、リ、ヨリ請取リタル
口演書ヲ送付スコノ口演書ハ同氏一千八百六十
四年十月二十二日ノ盟約ヨリ起リタル爭議ヲ鎮
定スルニ最満足ナル策ト思ハルベキモノヲ余ニ
教示ヤシモノナリ此口演書ニ依リ余ハ條約各國
ノ公使ガ終ニ償金金額ノ拂方ニ定メ稅則ヲ節制

シ兵庫開港ニ向テ新ニ保主ヲ得タリシヲ知レリ
惜ムラクハ兵庫開港ノ電報中開港ノ月日ヲ記ス
ル所彷彿トシテ讀ムベカラズ且又コノ口演書ニ
依テ余ハ英國政府ガ償金ヲ半分スルノ論ヲ建テ
タリシヲ知レリ此論ノ公平寛大ナルヲ於テハ
他各國ヨリハ合衆國ハ殊ニ僥倖ト考ヘサルベカ
ラス若シ損失ノ度ニ隨テ分配スルキハ合衆國ノ割
前ハ最少ナレバナリ故ニ余ガ權限ニアル丈ハ此
論ニ一致スルヲ猶豫セザリシナリ亦同様ニ權ヲ
以テ余ハ英國ノ陳說ニ從ヒ第一賦五十萬弗ハ橫
濱英兵ノ金櫃ニ藏メ後コレヲ磅ニ替ヘ龍動ノ金
庫ニ藏ムベキヲ許セリ佛國政府ハコレニ同意セ
リ荷モ亦不日ニ同意スベシ是ニ於テ最早償金配

分ノ方法ハ落着セリ只缺ク所ノモノハ議事院ノ
批准ナリ故ニ余ハ頻ニ冀望ス議事院ノ批准ト償
金配分ニ付閣下ニ教示ヲ蒙ラシム

口演書

下ノ關償金ノ事ニ付兩議起リタリ第一ハ日本政
府第一賦ヲ拂フタル後第二賦ハ一年ノ延期ヲ請
求シタリ因テ此請求ハ許容スベキカ許容スベカ
ラザルカ或ハ償金ノ幾分ヲ減シ到底要求セザル
カ而シテ此二問ニ於テ孰レヲ取リ其代ニ如何ナ
ル賠償ヲ要求スベキヤ第二ハ償金ハ如何ナル方
法ヲ以テ配分スヘキヤ日本政府ノ拂フタル金額
ハ如何ナル方法ヲ以テ請取ルベキヤ第一問ハ四
國公使ノ協議ニ付スルヲ宜シクス故ニ茲ニ第二

問ニ付ニ論ヤントス佛國皇帝ノ政府ハ初ノ日本
償金ノ配分ハ先ノ方法ヲ以テスルヲ宜シト考
ヘタリ償金ノ三分ノ二即チ二百萬弗ハ四國ノ下
關ニ出セル兵數ノ多寡ニ應ジテ配分シ三分ノ一
即チ百萬弗ニ付テハ佛米荷三國ハ損害特別ナルヲ
以テ各十四萬弗ヲ取リ剩金五十八萬弗ハ四國各
等分ナルヲ併シ英國政府ハ全償金ヲ四國ニ等分
スルトヲ好ムベリ見ユルヲ以テ佛國政府ハ容易
ニコレト同意シ合衆國モ亦コノ配分方法ニ異議
ナケレバ日本政府既ニ拂フタル第一次ノ賦金五
十萬弗ノ配分ヲ為サントス

第十五 一千八百六十六年八月二十八日在華盛
頓英國公使ソル、エフ、バルトス「ミストル、レゾル

ドニ送ル書

英國皇帝ノ外務長官ノ教示ニ隨ヒ下ノ關償金ト
シテ日本政府カリ請取リタル金額配分ノ方法ニ
付キ閣下ニ申陳スル尤ノ如シ
其二及ヒ第三賦ノ合計一百万弗ハ米佛荷三國ノ
願望ヲ問ハス四國等シク配分ヤリ併シ右三國ノ
願望ハ十四萬弗ニナレバ四國ニ分配スベキ殘數
ハ八十六萬弗ナリ之ヲ四分スレバ二十一萬五千
弗トナル故ニ英國政府ノ割前ハ二十五萬弗ニア
ラズ即チ二十一萬五千弗トナル故ニ三萬五千弗ハ
返金ニ三國ノ配分ニ當テシム且又長官ノ命ヲ奉
シ書ヲ以テ日本官吏償金擔任ノ者ニ吟附シ在日
本米佛荷三國ノ公使ヘ各十一萬六千六百六十弗

ト三分テ合テ三萬五千弗ヲ付セシメントス
第十六「ソルハ」イバ「クス」ミス「トル」ハムニ送ル書
閣下定テ日本政府カ外國人取扱規則ヲ寛ニシ
ヨリ寧ロ下ノ關償金ノ殘餘ヲ拂フヲ選ミ近頃
佛國尼達蘭ノ公使及ヒ余ニ第四年賦ノ四分一ノ
三即チ三十七萬五千弗ニ一國ノ分前十
聞キタメテ余カ請取リタル金額ノ内或ル部分
ハ閣下ニ讓與セザルベカラス此由縁ヲ解明スル
タメニ八年前ニ償金分配ニ關係シテ我々四國ノ
政府約定スル呼テ引用シ閣下ノ高見ヲ煩ハス
四國即チ佛英荷米ニ日本政府ヨリ拂フベキ償金ヲ
配分スル方法ハ一千八百六十五年巴黎ニ於テ商
議セラレタリ佛ノ外務長官「モスレ」ス「ド」リン「ス」ハ

各國ノ在日本兵ノ多寡
佛兵千二百二十五人
英兵九百
五十一人
米兵二
比例シテ配分スベシト云ヒ在
巴黎米國公使「ス」トル「ビ」ゲ「ロ」ハ下ノ關一件ニ
付テハ同盟國互相助ケ成功ヲ奏シタレバ見ニ出
兵シタルハ各同シカラズト雖ソリ勉苦ヤシ本
心ニ於テハ豈ニ輕重アラシヤ或ニ四國各平均ノ
配分ヲ得バシト英國皇帝陛下ノ政府ハ「ミ」スト
ビ「ゲ」ロ「ノ」意見ニ快ク一致シタリ因テ四國政府
モ亦平均配分ノ法ニ一致シタリ
又佛國人及ヒ米荷ノ船ハ同盟船隊ノ長州ト戦ヒ
シ前ニ或ル損害ヲ受ケタルヲ以テ其償金ニシテ各
十四萬弗ヲ三國政府ニ與フベシト同盟四國一致
シタリ此金三國分合テ四十二萬弗トナル故ニ各

賦五十萬弗、内ヨリ七萬弗ツ、除去シ右三國ニ
分配シ殘四十三萬弗ハ四國等シク配分スベシ然
ルニ日本政府ハ右償金ヲ等シク四分シテ各十二
萬五千弗ツ、拂フタリ故ニ英國公使ハ約定ノ如
ク四十三萬弗ノ四分ノ一即十萬七千五百弗ヲ請
取り剩金一萬七千五百弗ハ佛米蘭三國ノ公使ニ
交付シタリ
前文ノ譯ヲ以テ今四年賦即英四年賦金ニ於テ
モ日本政府ハ余ニ十二萬五千弗交付セシヲ以テ
該額ヨリ一萬七千五百弗除去シ閣下及ヒ佛荷ノ
公使へ送付ス此一萬七千五百弗ヲ三分シ閣下ニ
送付スベキ分ハ五千八百三十三弗三十三セシト
トナル

第十七 千八百七十二年五月廿日下院外國事務委員長
バンクス氏ヨリ日本償金ニ係ル具申
外國事務委員ニ附スル所ノ議案數種アリ即チ舊
本米國公使館書記官ヲ命スル議案、在日米公使館
建築ノ費用ヲ日本政府へ還付スベキ議案及日本
償金ノ殘額ニ係ル議案及右償金ニ係ル國務卿ノ
通信書類是ナリ而シテ外國事務委員之ヲ熟議セ
且之ヲ下院ニ具申シ併テ日本償金ノ原因及其性
質ヲ陳述ス
日本及基督教諸國ノ貿易交際ハ千八百六十二年
合衆國ヨリ水師提督ヨリシテ渡海ヨリ始メ而シ
テ千八百五十四年三月三十一日即チ合衆國ト日
本和親條約ヲ鈐印ス是即チ本國ト結ベル條

總ノ船ヲ以テ此條約ニ因テ不爲ニ豆州下田
及松前ノ函館港ヲ開キ且米人ノ爲ニ下田港ノ一
島ヨリ起算シテ日本里數六里ノ間内國通行ヲ許
可シ下田港ニ合衆國領事ヲ置クヲ許セリニ
百年間外國交際ヲ嚴禁シテ後合衆國ニ因テ交際
ヲ開クヲ斯ノ如シ從來葡萄牙及荷蘭ノ内國ニ年
一二艘ノ船ヲ日本ニ遣ルヲ得シカ其貿易ニ堅
キ制限アリテ更ニ民ト交際スルヲナシ合衆國
ノ成功ニ因テ英普ノ兩國亦日本ニ來リ米國ト條
約ヲ翌年英普及荷ノ三國共ニ日本ト條約ヲ結ベ
リ爾後千八百五十七年六月七日水師提督ペリ
トノ條約ニ因リテ肥前長崎港ヲ開キ且合衆國人
民下田函館ノ兩港ニ永居スルノ權ヲ得タリ千八

百五十八年七月ニ至リ米國公使ダウソンドハ
ルリス千八百五十四年合衆國ト支那トノ條約ニ
基キ日本ト條約センヲ高議セリ此條約ニ因テ
日本ニ米國公使ヲ遣キ幕府ニ日本公使ヲ置
ク又合衆國ノ諸港ニ日本領事ヲ置クヲ許セリ
斯ノ如クシテ米國貿易ノ爲ニ所設ニ神奈川長崎
新潟及兵庫ノ諸港ヲ開キ且貿易ノ爲ニ江戸大坂
米人ノ居住ヲ許可シ宗旨ノ自由ヲ附與シ且禮拜
堂ノ如キハ日本政府ニ因テ之ヲ保護セリ
日本ニ百年間鎖國ノ後基督教ノ大國ニ交際ヲ結
ブト斯ノ如ク然ルニ大名等之ヲ抵抗スルニ
クハルリテ貿易條約ヲ結ブニ翌年ニ至テ國內大
ニ騷擾ノ外國公使館ノ吏員ヲ殺シ公使館ヲ燒ク

至... 而... 大名ノ從臣等... 内ノ商人ヲ情
 迫シ外國人ノ貿易スルヲナカラシメントセリ又
 小賈彼夫ノ輩黨ヲ結テ外國交易ヲ拒ミ且外國
 貿易スル商人ヲ惡シ終ニ有名ナル絹商數輩ノ暗
 殺セリ日本政府ノ處置ニ背遠スル者沿海ノ諸港
 及緊要ナル海軍ノ屯營一二所ヲ奪テ之ヲ據ル以
 テ外國ノ船舶ヲ襲撃シ千八百六十三年亦國軍艦
 船イライミンゴ号及商船ベンブ号共ニ之
 砲撃ニ遇ヘリ千八百六十四年周防長門ノ領主下
 關海峡ノ砲臺ヲ奪領シ自ラ國帝ヲ擁ニ大君ノ
 外國條約ヲ認取セス兵力ヲ以テ日本内海ノ海口
 ヲ閉鎖セリ
 此葛藤ノ際ニ當テ大君鎖國論ノ大名ヲ慰メシカ

3

為ニ其請求久ル所ニ應セントセシカ條約諸國ノ
 大君ニ助カスルヲ以テ又遂ニ之ヲ為サス且大君
 ノ依頼ニ自リ當時日本海ニ碇泊セル英荷佛四
 國ノ海兵協同シテ關海峡ヲ開カンカク史シ千
 八百六十四年九月四日遂ニ兵端ヲ啟キ戰爭五日
 ヲ費セリ此時下關海峡ノ砲臺ヲ奪破シ火藥庫ヲ
 破壊シ彈丸ヲ海中ニ投シ大砲數門ヲ奪取シ長州
 藩主終ニ降伏シテ其軍費ヲ償ハシテ之ヲ納メ
 後國帝自ラ各國ノ條約ヲ確定シ曾テ大君ノ為セ
 シ所ノ如クシ以テ全國ノ權ヲ合有セシメテ
 大君ノ施行セル開國ノ處置ヲ決定セリ是ニ於テ
 大君政府長州ノ約セシ償金ノ額ヲ擔當シ千八百
 六十三年十一月二十二日條約ヲ結ビテ三百萬弗ノ

償金 國ニ交付セシメ約ニ依ル但シ此金額ハ
長州暴動ノ償一ノ下關贖金同盟海軍入費等一切ノ
償額ナリ而シテ毎季五十萬弗ヲ交付セベキ一ノ
約セリ
此條約ニ依テ既ニ交付セル金額百五十萬弗ニシ
テ未タ交付セサル者百五十萬弗アリ而シテ此殘
額ニ就テハ日本政府金庫疲乏ニヨリ條約ノ如ク
各國ノ求メニ應フコト能ハス然レ其各國ニ對シ
ルノ義務ニ至テハ必ス之ニ違ハサルヲ以テ千八
百七十二年迄延セシメテ請ヘリ
國務卿外國事務委員ニ告テ曰ク條約ニ依テ四國
ニ交付スベキ金額ハ三百萬弗ニシテ此金額ヲ六
分ニ毎季其一分ヲ交付スベキ一ノ約セリ而シテ

4

其三分即チ百五十萬弗ハ既ニ之ヲ交付シ其三分
ハ未タ之ヲ交付セズ而シテ金額百五十萬弗ノ内
合衆國ノ分三十七萬五千弗ナリ
既ニ合衆國ノ領土ニ於テハ倫敦ガリ
バチソルズ社中ニ預ケ八萬八千八百八十一磅
十八七林十邊厄ノ額ヲ得タリ而シテ之ヲニユ
ヨルク府ニ移スニ紙幣五十八萬六千二百一十二弗
八十七錢ヲ得タリ而シテ此金額ヲ以テ一國證
券ヲ買入シ其利子ヲ以テ又合衆國證券ヲ買入セ
リ其總額方今七十萬五千弗ナリ國務卿
十一次議事院第二會上院行政ニ文第五十八ニシテ
以テ通知シテ曰ク余此金額ニ對シテ請求スル者

一 部 省

船... 大砲五十六門... 載セル沿岸... 償金下関贖金及同盟海軍... 上ニ及ベリ然ルニ長州ノ暴動... 六十四年下関戦争ノ費ハ唯数千... 故ニ前國務卿ノナルムハ... へル如ク此償金ニ要求スト雖モ... フベキ同額ノ費用ナシト外國事務委員前... 府ニ返付スルモ合衆國政府或ハ其人民ノ害トナ

ラカニコヲ信々而シテ斯クノ如キ處置ヲ為ス... 及開化ノ進歩ヲ裨益スベシ... 外國事務委員一... 付セリ償金ハ残額ヲ拂フベキ義務ヲ免レシム... 第十八 日本償金ノ残額返付ノ儀ニ付合衆國... 長教授學監等四百五十二名連署... 但シ千八百七十三年... 事務委員ニ附シ且命ニテ印... 亞米利加合衆國上院及下院... 者恭ク左ノ

ハ目的ニモ適用ス且公平寛大ニ人民ナル合衆
國ノ性質ニ似合ハサル情實ハ可ク日本ニ要求セ
ルヲ以テ未タ政府ノ費用ニ供セサル大金アリ而
シテ今之ヲ盡シ日本政府ニ返付スルハ於テ難事
アリト雖宜ク日本人民ノ利益ニ注目シ以テ之ニ
一層教育ノ方便ヲ附與シ且我國文明ノ裨益ヲ附
與セサル可ニサルノ道理アリ
此等ノ明亮ナル道理アルヲ以テ下名ノ者議事院
ニ保薦スルニ公明適宜ノ處置ヲ施シ以テ日本人
民教育ノ為ニ宜ク此全員ヲ應用セシメテ而シテ
其規則及制限ノ如キハ議事院ノ適宜ニ任セ之ヲ
制定スベシ或ハ又約束ヲ設ケ不レ之ヲ日本政
府ニ返附セシメラ

依テ下名ノ者謹テ願望ス議事院ニ於テ此全員ヲ
應用スルニ委員ヲ命シ或ハ他ノ方法ヲ立テ合衆
國ノ面目ヲ音クシ且日本人氏ノ利益ヲ立トスル
カ如キ方法ヲ以テ之ヲ支消ヤレテラ
連署セル學校教育局及學監左ノ如シ
ウヰルレムス大學校七名、ハトダハルド大學校七
名、ウエルモヒト大學校六名、ヤトル大學校四
名、カルフホルンヤ大學校十三名、コト下ア
ドナラウシ大學校九名、ボトドイン大學校十一名
アメルスト大學校八名、ノリン州バーナ大學校
六名、ノリン州バンゴル神學校五名、ニユーヨルク
州ユニオン大學校九名、コニハカウット州ミッド
スタウカウエスヤン大學校ハニユーヨルク

文 音 省

府大學校七名、ニューヨルク州カトントンセイント、
ロイヤル・レシス大學校二名、ニューヨルク州立師範學校
十五名、ニューヨルク州ブルトン州立師範學校
九名、コンチネンタル州ブルトン州立師範學校
學校六名、コンチネンタル州ブルトン州立師範學校一
名、(但シ休業中) ニューヨルク州ブルトン州立師範學校
大學校三名、ミシガン州大學校六名、オハヨ州オベル
リン州大學校四名、ミシガン州オリウヰット州大學校五
名、イリノイ州スウエスタルン州大學校七名、
インディアナ州バルトスウヰル州大學校五名、ウヰス
コンチネンタル州ベロイト州大學校八名、ウヰスコンチネンタル州
州ミルトン州大學校三名、ウヰスコンチネンタル州リボン

ア

大學校五名、ウヰスコンチネンタル州カルロル大學校六
名、(但シ休業中) ペンシルヴァニア州ラフベイト州大學校
八名、ペンシルヴァニア州ランクリン、ランド、マシヤル
ン、シルウァニヤ州フランクリン、ランド、マシヤル
大學校六名、ラヂヤン州大學校及神學校四名、マリ
エッタ州大學校七名、ニューヨルク州レバノン、マツケン
州、リバー州大學校四名、ニューヨルク州ハミルトン州大學
校六名、マサチウセツト州、ウヰスコンチネンタル州立
師範學校二名、ニュージエルゼ州、ヒントン州立師範
學校一名、オハイヨ州オックスフォード州女學校八名、
マリタ州、カールトン州大學校三名、ミッソリ州、
セントジョセフ州大學校七名、ウヰスコンチネンタル州、
大學校六名、アラバマ州、ハズルド州大學校七名、
ジョージア州、

インズバロト女學校四名、テグサス州インデペンデ
ンス、ベトレル大學校五名、イーストテンネッシー
大學校四名、ニューヨーク州シラキエース大學校
七名、テンネッシー州々立女學校六名、ニッソル州
ウハサール大學校十名、ニッソル州コロムビ
ヤ大學校八名、ニッソル州アルバクリンハイ
トス、パワ、ワル大學校二十八名、ミシガン州カ
リ、大學校四名、オハイオ州オットルベ、イン、大學
校六名、ペンシルバニア州ニッソル、ウヰルミ
ウエスト、ミニスソル大學校五名、オハイオ州々立
師範學校六名、ソートン州フ、ミンゲト、州立師範
學校二名、ニッソル州ラクス、ゴ、教育局八
名、ニッソル州シラキエース教育局七名、マ

9

チュセツト州スプリングス、ールド學校事務局六
マサチュセツト州教育局書記官サミエ、ル、ウ、オ、イ
ン、デ、フ、ナ、州、ア、ス、バ、ン、大學校長、レ、ウ、エ、ン、ア、リ、ル、
ア、ン、ド、リ、ユ、ス、ロ、ド、ア、イン、ド、州、公、學、事、務、官、ト、
マ、ス、ダ、ブ、リ、エ、ル、セ、ツ、ク、子、ケ、ン、タ、ケ、州、ベ、ズ、ル、大
學、校、長、ハ、ア、ケ、ル、カ、ウ、キ、ス、州、學、監、カ、フ、リ、ユ、ル、
ヤ、ク、ソ、ン、ニ、エ、ル、ハ、ウ、ン、學、監、ジ、エ、ル、ダ、ブ、リ、ユ、ル、
モ、ン、ド、ス、ウ、エ、ル、ニ、ヤ、州、學、監、ダ、ブ、リ、ユ、ル、エ、ク、ラ
フ、子、ル、北、カ、ロ、ラ、イ、ナ、州、學、監、ア、レ、キ、サ、ン、ド、ル、エ、ハ、
イ、ウ、キ、ス、ミ、シ、シ、ピ、州、學、監、エ、ク、ア、ール、ピ、ル、ス、ケ、ン
タ、リ、ケ、州、學、監、エ、ク、エ、ヘ、ン、ド、ル、ソ、ニ、ミ、子、ソ、タ、州、學
監、エ、ク、エ、ト、ウ、キ、ル、カ、ン、ア、イ、ラ、州、學、監、エ、ク、ア、ル、子
セ、ー、コ、ウ、ム、ビ、ヤ、即、學、監、ジ、エ、ル、カ、リ、ウ、キ、ル、カ、ン、ア、イ

七
部
首

リノ井州學監ニエートトマニカルフホル
ニヤ州學監シト、エニボランルニエトイヨ州學監
テイ、ダブリユート、ハトウ、エイシテアナ州テ、ホリト學
監、ダブリユート、ダブリユート、ウ井レ、北カ、ロ、ライナ
州大學校長ソロモン、ポトル、ミツリ、州シエウ、ル
ソニ府學監シエト、モンテ、ス、ミ、ガ、ン、州ランシ
グ住、エ、ラ、ン、ホ、ド、マ、サ、チ、セ、ツ、州、ウ、ル、ス、ダ、ル
學監、エ、ピ、ト、マ、ル、アル、總計四百五十二名

マサチユセツ州ケムブリッジ、ハトウ、ダ、ル、ド、大
學校教授ヨリノ願書

亞米利加合衆國上院及下院ニ下名ノ者茲々九ノ
條ヲ陳呈ス、爰ニ貴下等ノ處分スベク出テ来、何ノ

目的ニモ適用セ、且公平寛大ノ人民タル合衆國
ノ性質ニ似合サル情實ヲ以テ日本ニ要求セルヲ
以テ、未ダ政府ノ費用ニ供セサル大金アリ
此等ノ明亮ナル道理アルヲ以テ、下名ノ者議事院
ニ保薦ス、公明適宜ノ處置ヲ施シ、約束ヲ立テ
ス、シテ日本政府ニ此金額ヲ返付ヤン、トヲ
右願書連署者、如シ
ハトウアルト、大學校長チャールズ、ダブリユート、イリヨ、
ト、同校教授、エ、ピ、ト、ボ、テ、フ、ラ、ン、シ、ス、ボ、ト、ウ、エ、
シ、ジ、ヨ、マ、フ、レ、ウ、エ、リ、ン、グ、エ、チ、ダ、ブ、リ、ユ、ト、ド、レ、
チ、
パール、ス、エ、フ、ダ、ン、バ、ト、ル、及、イ、ト、ダ、ブ、リ、ユ、ト、ガ、ル、子

